

学校を中心とした地域連携による生涯学習の 環境づくりについて

～「まなぶ いかす つながる」地域づくりの可能性～

(報 告)

滋賀県社会教育委員会議

平成24年(2012年)3月

目 次

はじめに

第1章 学校を支援するための団体の現状

1. 学校から聴取した団体の現状	4
(1) 自主的に組織した団体の属性等	4
(2) 支援や提案の状況	4
(3) 地域の方と学校との双方向システムを進めるための必要条件	5
(4) 双方向システムのメリットと問題点	5
2. 特徴的な活動の取組内容	6
(1) 団体から聴取した活動の概要	6
(2) タイプ別に見た活動の内容等	6
(3) タイプ別に見た学校以外での活動の内容等	6
(4) タイプ別に見た活動の工夫点	7
(5) タイプ別に見た支援活動の取組成果	7
(6) タイプ別の実践例	7
ア 大津市立堅田小学校「堅小 おや連！」の取組	7
(ア) 団体設立の経緯と取組内容	7
(イ) 活動の成果	8
(ウ) 今後の課題	8
イ 湖南市立石部小学校「学校応援団」の取組	8
(ア) 団体設立の経緯と取組内容	8
(イ) 活動の成果	9
(ウ) 今後の課題	9

第2章 学校支援と地域活動の推進

1. 学校支援の推進	11
(1) 互惠性の関係	11
(2) 支援活動における学校側の対応	11
(3) コーディネーターの存在	12
(4) 学校と外部のコーディネーターやボランティア等との意思の疎通	12
(5) 広報	12
(6) 活動スペース（部屋）の確保	13
(7) ボランティアの募集と研修	13

2. 地域活動の推進	13
(1) 活動の新たな展開	13
(2) 学校はきっかけづくりの中心	13
(3) 人間関係づくり	14
(4) 意図的な仕掛け	14
3. 学校と地域との連携の推進	14
(1) 基盤整備の視点	14
ア 教育委員会の役割	14
イ 活動経費の調達	14
(2) 組織・計画の視点	14
ア 組織づくり	14
イ スムーズな運営	15
ウ 人材の発掘や確保	15
(3) 情報共有の視点	16
ア 学校から他の学校へ発信	16
イ 学校から地域へ発信	16
ウ 双方向の情報	16
(4) まちづくりへの発展の視点	16

第3章 学校を中心とした「まなぶ いかす つながる」 地域づくりの可能性

1. 学校支援活動は「三方よし」の活動	17
(1) 学校側にとって	17
(2) 支援活動を行う側にとって	18
(3) 地域社会にとって	18
2. コーディネーターの養成・研修	18
3. 学校支援活動から地域づくりへ	19
(1) 多様な人々との触れあいを通じて充実した教育を提供する視点	19
(2) 大人の生涯学習の場としての視点	19
(3) 学校を中心とした地域づくりの視点	20

審議経過

滋賀県社会教育委員名簿

おわりに

はじめに

1. テーマについて

今日的な教育・学習上の課題やニーズに対応するため、平成18年に教育基本法¹⁾が改正され、その理念を具現化するため、平成20年にとりまとめられた中央教育審議会答申²⁾を受けて同年に国の「教育振興基本計画」が策定されました。滋賀県におきましても、将来のあるべき姿をしっかりと見据えた教育を推進する必要があることから、教育分野全般にかかる平成21年度から5か年間、中期的な計画となる「滋賀県教育振興基本計画」³⁾が策定されました。

本計画では、「教育にかかわる学校、家庭、地域、団体・NPO、企業等が、相互に連携して、より大きな教育的効果を生み出すには、それぞれをつなぎ、連携をサポートする仕組みが必要となる。」としています。また、多様化する県民のニーズや課題に対応するためには、「人材育成や情報提供などを通じて、分野を超えて総合的なコーディネートができる仕組みをつくっていく必要がある。」としています。

また、平成22年にとりまとめた滋賀県社会教育委員会提言『住民同士が学びあい、住民相互が支えあう地域のきずなづくり』⁴⁾では、学校を地域の中心として「PTA、地域住民、企業、団体・NPO関係者が学校への関心と理解を深め、連携ができるよう、各学校における体制整備と支援者のネットワークが広がるための支援を行う。」「行政における学校教育と社会教育の連携・協力を進める。」ことが大切であるとしています。さらに、地域のきずなづくりを進めるためには、「様々な活動主体が連携してのまちづくり、そして、連携を進めるためにコーディネートシステムの機能充実が重要と考える。」としています。

そこで、今期の滋賀県社会教育委員会では、「滋賀県教育振興基本計画」や平成22年にとりまとめた「滋賀県社会教育委員会提言」を受け、学校教育と社会教育の連携・協力だけではなく、連携を進めるためのコーディネートシステムの機能充実ならびにまちづくりについて研究することとして、審議テーマを『学校を中心とした地域連携による生涯学習の環境づくりについて』としました。また、平成23年3月に策定された「滋賀の生涯学習社会づくり基本構想」にある「まなぶ」「いかす」「つながる」という3つの視点からも、地域づくりの可能性について検討することから『まなぶ いかす つながる』地域づくりの可能性」を副題としました。

2. 報告書の全体像

今回の報告書では、先述のテーマに関して、以下の構成で整理しています。

第1章の「学校を支援するための団体の現状」では、学校の支援を目的として、地域住民が、自主的に組織した団体について行ったアンケート調査の結果の分析と、実際の活動現場を視察し、ヒアリングを行った結果を記述しています。

* 1) 2) 3) 4) については、〈参考資料2〉を参照

第2章「学校支援と地域活動の推進」では、アンケート調査、ヒアリングを通じて、学校支援と地域活動の中に見えてくるものについての考察を記述しています。

第3章の「学校を中心とした『まなぶ いかす つながる』地域づくりの可能性」では、学校支援活動が豊かな地域づくり活動へ展開していく可能性について記述しています。

3. 研究調査について

学校の支援のために自主的に組織した団体の現状について実態を把握しておく必要性から、以下のアンケートやヒアリングを行うこととしました。

現在、包括的なデータが無いため、数、規模、活動内容等の実態だけでなく、そのような団体は、学校を支援するだけではなく「地域づくり活動」まで展開しているのかやコーディネートシステムの機能がどこまで充実したものになっているかを明らかにするためです。

(1) 第一次調査(アンケート)

ア 内容

県下全ての学校（公・私立幼稚園・小学校・中学校）の支援のために保護者や地域住民等が自主的に組織したグループ・団体（ただし、既設のPTA、学校支援地域本部^{*1}）および個人を除く現状についてアンケートを実施する。

イ 調査対象園校数

幼稚園<189園>、小学校<233校>、中学校<106校> 合計528校

ウ 調査時期

平成23年2月8日（火）～18日（金）

エ 回収率

幼稚園<186園>98.4%、小学校<231校>99.1%、中学校<103校>97.2%

合計520校・園<全体98.5%>

(2)-1 第二次調査(アンケート)

ア 内容

第一次調査で自主的に組織した団体が「ない」とし、学校側から積極的に地域に支援を求めているなかったり、地域からの提案がないので、今後は積極的に支援を求めていくと回答した学校に対して、抽出してアンケートを実施する。

イ 調査対象園校数

幼稚園<34園>、小学校<9校>、中学校<19校> 合計62校

ウ 調査時期

平成23年5月19日（木）～6月3日（金）

^{*1} 『学校支援地域本部』／実施委託要綱（H20.5.12 生涯学習政策局長決定）では、地域全体で学校教育を支援する体制づくりを推進することにより、教員や地域の大人が子どもと向き合う時間の増加、住民等の学習成果の活用機会の拡充及び地域の教育力の活性化を図ることを目的にした事業。この事業では、地域コーディネーターが地域の窓口役になり、地域の方々に学校支援ボランティアとして学校の活動に協力してもらいながら進めるもの。

エ 回収率

幼稚園<33園>97.1%、小学校<9校>100%、中学校<17校>89.5%

合計59校・園<全体95.2%>

(2)-2 第二次調査(アンケート)

ア 内容

第一次調査の自主的に組織した団体で「特色ある活動内容」を行っている、あるいは、「学校と外部の団体の間に立って、学校からの支援の依頼・学校に対する支援の提案といった双方向の支援活動を調整している人が他にいる」（以下、『コーディネートする人が他にいる』という。）について回答をされた団体に対して、抽出してアンケートを実施する。

イ 調査対象園校数

幼稚園<13園>、小学校<42校>、中学校<16校> 合計71校

ウ 調査時期

平成23年5月19日（木）～6月13日（月）

エ 回収率

幼稚園<5園>38.5%、小学校<36校>85.7%、中学校<12校>75.0%

合計53校・園<全体74.6%>

(3)第三次調査(ヒアリング)

ア 内容

第一・二次調査で「特色ある活動内容」を持つ団体、あるいは、「コーディネートする人が他にいる」団体など特徴的な活動をしておられる団体の存在が明らかになった。

そこで、それぞれの団体の活動内容をさらに詳しく理解し把握するために、代表的な団体について各々ヒアリングを実施することとした。

イ 調査時期・対象

○「特色ある活動内容」を持つ団体

平成23年7月16日（土） 大津市立堅田小学校「堅小 おや連！」

○「コーディネートする人が他にいる」団体

平成23年7月11日（月） 湖南省立石部小学校「学校応援団」

第1章 学校を支援するための団体の現状

県下全ての学校を対象に、学校の支援のために保護者や地域住民等が自主的に組織した団体について、以下の内容の第一次調査を実施しました。

- ① 団体の取組の状況（団体等の有無、名称、取組内容、活動回数、活動経費、支援年数、立ち上げのきっかけと理由等）について
- ② 「学校から外部の団体に支援を依頼する、あるいは、外部の団体から各校へ支援の提案をするときに、学校と外部の団体の間に立って調整をする人」（コーディネーター）の存在の有無、どのような立場の方、謝金等について。
- ③ 学校から団体に支援を依頼するとともに、団体から各校に支援の提案をしてもらうといった『双方向システム』の成立のための条件、成功例と失敗例等に関する内容について。

1. 学校から聴取した団体の現状

（1）自主的に組織した団体の属性等

「学校の支援のために保護者・地域住民等が自主的に組織した団体はありますか」と尋ねたところ、「ある」と回答した学校の率は、小学校で 75.6 %であったのに対して、幼稚園では 40.9%、中学校では 27.2%にとどまっていました。学校支援の団体は、小学校支援を中心に組織されていると言えます。また、「ある」とした学校1校あたりでの団体数を見ると、小学校では、平均 2.4 団体であったのに対して、幼稚園では平均 1.6 団体、中学校では平均 1.4 団体となっていました。

幼稚園や中学校で団体が「ない」とした理由としては、「積極的に地域に支援を求めている」という回答が、小学校と比較して多く見られました。

団体の支援内容で特に顕著であったのは、幼稚園では「読み聞かせ・読書活動支援」、小学校では「読み聞かせ・読書活動支援」「登下校の子どもの安全確認」、中学校では「生活・学習支援」「学校内環境美化」「読み聞かせ・読書活動支援」であり、支援する時期は随時となっていました。

支援をする団体が立ち上がったきっかけは、自発的であるとする回答が半数を占め、また、概ね 5～7 年の継続実績があることが分かりました。

（2）支援や提案の状況

学校が団体に支援を依頼する件数は、団体が学校に支援を提案する件数よりはるかに多くなっていました。

コーディネーターは、県下全校種で見ると、12.3 %であり、少数でした。なお、そ

の立場は、「まちづくり協議会」「学校運営協議会」*2といった組織に属している人が多いようです。中には、地域の住民を熟知していることから「市・町職員」がその役目にあっているというケースもありました。

なお、コーディネーターの活動経費が十分でないことが、課題であるということが明らかになりました。

(3) 地域の方と学校との双方向システムを進めるための必要条件

学校が団体に積極的に支援を依頼するとともに、団体からの支援の提案を受け入れるための必要条件は、「活動経費の調達」「コーディネーターの存在」「学校の実情を知ってもらうための情報の発信」「人材バンクの設置」、学校と地域とが一丸となって諸活動に取り組むなどの「地域の一体化」等でした。

その他、「日頃の人間関係づくり」の大切さや地域の人に学校を訪れていただくことにより、地域の人にとっては、学校が「喜びの場・居場所」になっているという回答もありました。

(4) 双方向システムのメリットと問題点

学校が、団体から支援を受けるメリットとしては、「学習・生活内容の充実」「子どもの経験の広がり」「地域での連携の良さ」だけでなく、「打合せなどを通してのコミュニケーションの活発化」が挙げられていました。

一方、学校が、団体への依頼や団体からの提案を受けて、問題となる点については「保険料などの活動経費の不足」の他に、「連絡不足」「打合せ時間不足」等のコミュニケーション不足と思われる回答が見られました。とりわけ、学校側は、地域の人を力に借りることにより、今の体制では、対応や打合せの時間を見出しにくい状況にあるため、連絡調整には工夫が必要となりました。

また、学校を訪れる外部のコーディネーターは、「教員は、何に困っておられ、地域の人にどうして欲しいのかが分からない」場合があるようです。さらに、そのコーディネーターだけでなくボランティアは、学校からの情報が一方的であるという意見もあり、互恵性、いわば「Win-Win」の関係を築いていくことが必要です。

なお、第一次調査で、学校の支援のために保護者や地域住民等が自主的に組織した団体が「ない」とした学校のうち8割が、老人会や民生委員・児童委員の会議、学校後援会等の「既設」の団体および個人による取組があると回答しました。支援が「ない」という回答は、中学校で多くなっていましたが、「取り組んでいない」理由として、『支援を依頼する必要を

* 2 『学校運営協議会』／平成 16 年(2004 年) 6 月に「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」が改正され、教育委員会の指定判断により、「学校運営協議会（コミュニティ・スクール）」を置くことができるようになった。

「学校運営協議会」は保護者や地域住民による合議制の機関であり、教育委員会や校長と責任を分かち合いながら学校運営に携わっていくことで、地域に開かれ、支えられる学校づくりの実現を目指すものである。特に、学校運営の基盤である教育課程や教職員配置について、一定の責任と権限を持って意見を述べることで制度的に保障され、その意見を踏まえた学校運営が進められることになる。

(平成 23 年度 教育行政重点施策 平成 23 年(2011 年)発行 滋賀県教育委員会)

感じない』や『支援を依頼したいが課題がある』とする回答でした。その具体的な課題の内容としては、「情報が足りない」「コーディネートをする人がいない」「予算が足りない」でした。また、『支援を依頼するのを感じない』理由としては、「支援を受けなくても教職員だけで教育活動ができている」「支援を依頼すると今以上の負担が増える」との回答がありました。

2. 特徴的な活動の取組内容

第一次調査において把握した「学校のために自主的に組織した団体」を「特色ある活動」を行う団体と「コーディネートをする人が他にいる」団体とに分け、それぞれの団体のうち3分の2程度を抽出し、その詳細について第二次調査を実施しました。

(1) 団体から聴取した活動の概要

小学校で支援している団体については、「読書（読み聞かせ）グループ」「後援会・協議会等」が多数であり、とりわけ小学校ではスクールガードや学校の環境保全などの「安全確認」のための団体が多いです。

団体の構成メンバー数は、小学校で20人前後が最も多くなりました。

活動年数は、60年以上続く団体もあるものの、6～10年前後の活動をする団体が多くなりました。

また、活動場所の中心は、ほとんどが学校ですが、公民館・集会所を活用する団体も若干ありました。

入会にあたっての資格等は大半が不要で、指導できる人ならば入会可能となっていました。

さらに、団体の立ち上げに関しては、「学校を訪れる外部のコーディネーターとボランティアからの自主的な立ち上げ」と「学校からの提案・依頼による立ち上げ」が半数ずつでした。また、「個人からの立ち上げ」よりも複数人による立ち上げの方が多くなっていました。

(2) タイプ別に見た活動の内容等

「特色ある活動」を行う団体では、「イベントの参加（祭り・スポーツ）」「環境整備・保全」活動を行い、「コーディネートする人が他にいる」団体では、「図書ボランティア」活動が多くなっていました。

なお、「コーディネートする人が他にいる」団体では、資質向上のために研修の必要性を求めています。

(3) タイプ別に見た学校以外での活動の内容等

学校以外での活動の実施について、「特色ある活動」を行う団体の方の取り組んでいる割合が高く、とりわけ、市町との関わりも深い取組をされていました。

また、タイプの別に関係なく、団体による学校および地域のための支援の様子を週あたりの活動回数として調査したところ、「学校への支援」の方が「地域への支援」

より多くなっていました。

さらに、「特色ある活動」を行う団体では、他の既設団体の活動内容を参考にしたとする割合が高くなっていました。

(4) タイプ別に見た活動の工夫点

「特色ある活動」を行う団体および「コーディネートする人が他にいる」団体においても活動状況に関する広報は、学校・学年・学級・PTA通信、ホームページ等を活用して行われ、人の交流や活動の工夫が図られていました。

とりわけ、「特色ある活動」を行う団体では、「チラシ・リーフレット作成」「各区長と学校とで連絡を密にする」「三世代交流ソフトボール」等がなされていました。

また、「コーディネートする人が他にいる」団体では、「グループの代表者と学校との連携」「会議等でのゲーム的要素の導入」「会報の発行」「団体との連絡会や交流会」等がなされていました。

(5) タイプ別に見た支援活動の取組成果

「特色ある活動」を行う団体および「コーディネートする人が他にいる」団体において、学校支援の取組は、大半の学校が「大変役立った」や「役立った」と回答していました。

とりわけ、「特色ある活動」を行っている団体と「コーディネートする人が他にいる」団体ともに、地域との「つながり」の充実という点で大きな成果があると回答していました。

また、「特色ある活動」を行っている団体は「伝統の継承」で、「コーディネートする人が他にいる」団体においては「学校の諸活動」で成果が見られました。

(6) タイプ別の実践例

自主的に組織した団体で、「特色ある活動」をされた団体と、「コーディネートする人が他にいる」団体とをそれぞれの団体の活動内容をさらに詳しく理解し把握するために、各々代表的な団体についてヒアリングを実施することとしました。

「特色ある活動内容」を行う団体については、平成23年7月16日（土）に大津市立堅田小学校「堅小 おや連！」を訪問しました。また、「コーディネートする人が他にいる」団体については、平成23年7月11日（月）に、湖南市立石部小学校「学校応援団」を訪問しました。

ア 大津市立堅田小学校「堅小 おや連！」の取組

(ア) 団体設立の経緯と取組内容

①「堅小 おや連！」の願い

子どもの学校の活動に参加していない保護者が多い。女性ばかりが参加するPTA組織のほかに、おやじの出番や頑張っている姿を見たい、見せたい。子どもたちに活動させたい。

②「堅小 おや連！」の経緯

・平成18年にPTAの役員が発起人となり「おや連！」の準備委員会を発足（6年

目)

- ・全校保護者を対象にアンケート調査実施。
- ・キャッチコピー「できる人が できる時に できることを」。
- ・メンバーは、小学校在校生・卒業生の保護者。
- ・天津市子ども会育成連合会、子ども安全リーダーへも加入する。会則、規約等
はなし。

③「堅小 おや連！」の組織

- ・学校の範囲内での有志による活動で、小学校の保護者であっても良いし、卒業生の保護者であっても良い。
- ・天津市の子ども会育成連合会のメンバーには所属しているものの、その他、市や地域の各種団体の位置づけには至っていない。
- ・役員は、事務局長、事務局次長、会計（小学校PTAとは別組織である）。

④ 活動実績

< 堅田小学校 >

- ・流しそうめん ・学校正門のペンキ塗り ・足型フットマーク設置
- ・スポーツ教室 ・木の遊具づくり（間伐材）
- ・アフガニスタンへの「思い出のランドセルギフト」寄贈

< 堅田小学校PTA主催「わいわい祭り」（11月） >

- ・1ブース1コーナーで廃食油を使つてのキャンドルづくり ・「おばけ屋敷」

< 堅田学区 >

- ・【湖族まつり】における自治会対抗「湖族船競漕」 ・堅田まち歩きウォッチング

(イ) 活動の成果

校区の住民、会員、子ども、学校、保護者に好印象であり、安全についての意識付けもでき、また、別の組織のネットワークの利用・活用もできた。さらに、地域行事等への参加などで、地域住民とのつながりが深まった。

(ウ) 今後の課題

会員の増加ならびに参加者の声（ニーズや要望）の把握が必要となった。また、学校やPTAでやりたいがやり難い事業を引き受け、地域に貢献しうる組織に発展させていくことである。さらに、会議会場として学校以外を活用するとか、各種の備品は自主的に調達するなどの事務面・運営面においても自立が必要である。

イ 湖南省立石部小学校「学校応援団」の取組

(ア) 団体設立の経緯と取組内容

①「学校応援団」の願い

子どもが、たくさんの大人のひとと話をすることで、「自ら学ぶ子」「心の豊かな子」「たくましい子」を育てたい。大人が、家族以外の子どもと話をすることで、楽しさ、やりがいを感じてもらいたい。また、できる時間にできることをし、「子どもた

ちと顔見知りになって」いただきたい。

②「学校応援団」の経緯

16 年前から「子どもたちふれあいボランティア『いしべっこ』」が、10年前から「図書ボランティア『このゆびと一まれ』」が活動。平成20年度から文部科学省委託事業「学校支援地域本部事業」を受けて、コーディネーターを常置し、活動を開始した。

③「学校応援団」の組織

石部小学校「学校応援団」は、石部小学校と地域・ボランティア・PTA等をつなぎ連絡・調整をする役目を行っている。とりわけ、地域の人等が子どもたちとあいさつや顔見知りになることなど、ふれあう機会ができるようにしている。

④ 活動実績

＜「学校応援団」の立ち上げにあたり＞

- ・立ち上げは、自治会区長、PTA、スクールガード、商工会、老人クラブが参加。
- ・応援団員等グッズ（帽子、自転車のカゴに付ける啓発物、幟旗）の作成と設置。
- ・定例会等は、総会（1回／年）、本部役員会（4回／年）、常会（1回／月）、事務局員会（地域コーディネーター）を実施している。

＜「学校応援団」室＞

- ・ボランティア室（応援団室）は、学校を訪れる者の監視だけでなく、会議ができるとともに、くつろぎやすい部屋になるように運営している。

＜活動内容＞

- ・地域の人と顔見知りになる活動（＝つなぐ）には、見守りあいさつ、ふるさと石部学遠足、ラジオ体操、まちづくり協議会との連携（交通安全・自転車教室、図書館ボランティア、菊作りボランティア）を実施している。

＜広報＞

- ・校報は、PTAだけでなく校区全戸にも配布。新聞折り込みでも配布。インターネットでも配信。
- ・理髪店、病院、飲食店、銀行等に校報を入れたクリアファイルを常備して地域の人に見てもらいやすいようにしている。

（イ）活動の成果

広報活動や定例会で学校・コーディネーター・ボランティア・各種団体等の共通理解が図られ、地域の子どもと大人とが顔見知りとなり安全・安心体制が確立された。

また、支援の種類と協力の幅の拡大がなされた。

（ウ）今後の課題

「学校は行きづらい」という考えが地域に根強いと、学校に関わることで「学校は行きづらくない」という共通理解を広げるための広報活動や定例会が必要であった。学校・家庭・地域活動の充実を図るためにアイデアを積極的に取り入れたり協力したりして、意見を交流しあえる活動の充実が必要であった。今後は、学校応援団事務局

に部屋の管理を広く任せ、土・日や祝日等で開催されるまちづくりの行事と関連づけることも必要で、とりわけ、まちづくり協議会・PTA等との関係性を明確にすることも必要となった。また、学校応援団の認知度を今以上に高めるための取組も必要となった。

さらに、「つなぐ活動（学習ボランティアの充実、地域企業との連携、東日本とつなぐ）」の一層の充実を図り、教職員が異動等で職場が変更になっても熱がさめない取組の継続と地域の方の人材バンクづくりの推進が課題となった。

第2章 学校支援と地域活動の推進

第一次、第二次調査（アンケート）ならびに第三次調査（ヒアリング）を実施して明らかになったことを、「学校支援の推進」「地域活動の推進」「学校と地域との連携の推進」の観点から以下にまとめました。

1. 学校支援の推進

学校が団体からの支援を受けることによって、地域の子どもは地域で育てようという気運が高まり、子どもたちの学習・生活内容の充実や安全確保ならびに学校の様子を地域に知ってもらい広報活動が盛んになりました。

しかし、コーディネーターが学校の外部にいないと、調整する仕事が学校任せとなり、仕事量も増えることとなります。このことが、一部の学校が「積極的に地域に支援を求めている」理由ともなっています。

（1）互惠性の関係

コーディネーターやボランティアなど学校を支援する団体・個人と、支援を受ける学校側とが、常に良好な関係の中で、教職員や保護者が負担を感じない仕組みが必要です。お互いが、やって良かったと言えるような関係を共に作っていくことが大切です。

（2）支援活動における学校側の対応

地域との連携を通じてどのような学校づくりを進めていくかといった学校側の考えを分かりやすく地域に伝えることが必要です。それと同時に、学校は何に困っていて、ボランティアにどのようなことをして欲しいのか。また、「総合的な学習の時間」を中心に、年間計画を示し、教育内容を伝えることも大切です。学校側の具体的なニーズを明らかにすることが出発点です。

学校長や担当者が異動になって、事業継続が困難になったり、地域との連携が少なくなったという学校があります。学校は、地域の人々、子ども、保護者とを「つなぐ」重要な役割を担っています。それゆえ教育委員会は、地域連携に対する学校長や教職員の理解を深めていく必要があり、例えば、地域の人々の力を学校が借りることによって、教職員が精神的にも肉体的にも楽になること等の情報を、普段から教職員や地域など各方面に伝えることが望まれます。

さらに学校は、地域から支援の提案があった場合には、話をよく聞き、すぐに断るのではなく、学校の学習計画を考慮しながら、良い企画であれば積極的に活用するぐらいの心の余裕が大切です。

また、地域の方が学校に来られている場合は、その存在を学校の教職員が把握しておくことが必要です。

(3) コーディネーターの存在

コーディネーターが学校だけでなく団体の外部にすることが必要です。

また、コーディネーターの存在を職員会議やPTA総会等で紹介することも必要です。

コーディネーターは、教職員を対象とした研修に入り、教職員の悩みに耳を傾けることも必要ですし、外部のコーディネーターとボランティアを交えた会合に、学校側も参加して意見交換をするのも良いでしょう。できる限り学校を訪問し「日常の気づき」を汲み取るとともに、教職員とコミュニケーションを取ることが必要です。

さらに、学校に団体が支援できる内容を提案などすると、大いに学校と地域をつなぐ役割が期待できます。

学校は、外部のコーディネーターやボランティアとの連絡担当者を校務分掌^{*3}（滋賀県では、「学校と地域を結ぶコーディネート担当者^{*4}」）で位置づけています。

(4) 学校と外部のコーディネーターやボランティア等との意思の疎通

学校と外部のコーディネーターやボランティア等との間での打合せ時間は、なかなか見出せないこともあり、連絡ノートや黒板を活用する、コーディネーターやボランティアがそれらの中で一言感想や気づきを書けるようにするなど、意思疎通をするための工夫が必要です。コーディネーターには、学校のことを知ってもらうよう、常に連携を密にすることが大切です。

また、外部のコーディネーターとボランティアには、当日を含めたスケジュールと学習計画を用意し、共通理解を図ることも大切です。学校やコーディネーターは、毎日、ボランティアも含めて振り返りの時間が持てると、次回に生きてきます。

なにより、コーディネーターやボランティア等の外部からの支援者には礼節と感謝で接することが必要です。

(5) 広報

学校のおかれている現状や、ボランティアによる学校支援を受けての成果や変化などをつぶさに地域に広報することが必要です。支援事例および地域に支援を求めたい内容についても、学校だけでなく外部のコーディネーターやボランティアからも広報ができると良いでしょう。

また、学校を支援している団体は、学校を訪問しての感想等を地域の人に伝えることも大切でしょう。

さらに、ボランティア募集にも学校として、「学校だより」などを通じてボランティアを募集することで、学校としての人脈が活用できて活用がしやすくなります。

*3 『校務分掌』／「校務分掌」の仕組みを整えるとは、学校において全教職員の校務を分担する組織を有機的に編成し、その組織が有効に作用するよう整備することである。＜学校教育法施行規則第43条＞（平成21年度版 教育小六法 学陽書房）

*4 『学校と地域を結ぶコーディネート担当者』／県内全公立小・中学校および県立高等学校・特別支援学校において、地域の人の経験や技能を学校教育活動に取り入れるなど、学社連携・融合を推進する中心的な役割を果たす担当教員。

（平成23年度 教育行政重点施策 平成23年(2011年)発行 滋賀県教育委員会）

「広報」については、活動の成功例などの情報が地域や学校に自然に流れると、学校支援活動の取組や受入れを行う地域や学校の増加が期待できます。

(6) 活動スペース(部屋)の確保

学校内に外部のコーディネーターとボランティアの打合せや、ボランティアがふと立ち寄れるようなスペースが確保できれば良いでしょう。部屋があれば、外部のコーディネーターが常時詰め、子どもや来校者の様子が把握でき、また、ボランティアも待機・休憩できるでしょう。

(7) ボランティアの募集と研修

「あなたも何かできることをやってみませんか？」というような視点でボランティアを募ってはどうか。ボランティアの活動は、「やっていて楽しい」「いつでも気楽にできる」「できる人が できる時に できることを」する活動であることを、地域の人たちに伝えることが重要です。特に、こうしたことを平日に参加できる人に伝える工夫ができると良いでしょう。

また、コーディネーター主催でボランティアの研修会が行われると良いでしょう。「研修」については、学校支援内容のマナー化を防ぐだけでなく、力量を高めることが求められています。とりわけ幼稚園や小学校の活動への対応だけでなく、中学校の活動にも対応できる資質の向上や力量の育成が望まれています。誰もが会員になれば、参加でき、会員自らが楽しむ意識が高められることが必要となるでしょう。今後は、子どもとの触れあいにより生き甲斐が広がると良いでしょう。

2. 地域活動の推進

学校以外での活動を行っている団体を調査してみると、「特色ある活動」を行う団体は、市町との関わりが深くなっていました。

(1) 活動の新たな展開

とりわけ「特色ある活動」をしている団体については、市町など行政との関わりも多く、学校だけでなく、地域での活動にも積極的です。学校支援ボランティアとして新たに立ち上がった団体は、学校を接点にして人が集まりネットワークができます。そのネットワークがだんだん広がりを見せ、地域での活動へとつながっていく傾向が見られます。

(2) 学校はきっかけづくりの中心

1つの例として、学校を支援していたスクールガード（子ども見守り隊）だけが集まって、最初は顔あわせの茶話会が催されました。それがきっかけになって、メンバーの中から次は保護者とつながらないといけないという声があがり、夏祭りをしたり、川の清掃をしたりするようになったと言います。こういった事例からも分かるように、学校は、地域活動の活性化に向けたきっかけづくりの中心として重要な役割を果たしていると言えます。

(3) 人間関係づくり

学校を支援する団体や個人が学校支援に関する提案をされた時には、学校は、一度活動してみてくださいという柔軟な対応が望まれます。そのためには、平素から学校側だけでなく外部のコーディネーターやボランティアとの好ましい人間関係を築いておくことが、お互いが活性化されるために大切です。

(4) 意図的な仕掛け

学校支援を行うボランティア同士が交流できる機会を意図的につくっていくことで、人の流れもでき、新しい組織が生まれやすいです。また、ボランティアのための活動のスペースに、地域でのボランティア情報を知らせるための掲示板を設置しておくことも、支援活動の取組が活性化される要因となります。

さらに、誰でもボランティアをすることができ、「できる人が できる時に できることを」することの気軽さと活動内容について広報することで、事業がより活性化できて大いに役立っています。

3. 学校と地域との連携の推進

(1) 基盤整備の視点

ア 教育委員会の役割

学校支援を活性化させるために、主管する教育委員会がコーディネーターの設置だけでなく育成についても、積極的に対応していくことが必要です。教育委員会などが、コーディネーターの相談役や調整役としての、いわゆるトータルコーディネーターの役割を担うことが大切です。

また、中学校区で、役所や公民館に、地域をよく知る職員や、公民館にコーディネーターがいて、継続的にボランティア支援などが行えます。

イ 活動経費の調達

自主的に組織した団体が、より活発な学校支援をするためには、活動経費の調達がスムーズに行われることが必要です。そのため、活動経費を確保するにあたっては、自主的に組織した団体と学校や教育委員会とが相互に連携しながら既存の組織からの支援をうける、財団法人滋賀県教職員互助会（「一般財団法人」へ H25年4月1日より）の「学校生き生き活動支援事業」を活用する、さらには、校区内の住民や企業からの支援を募って活動経費とするとした、外部から経費を調達していく取り組みが考えられます。

今後、このように地域の理解の下で、活動経費の調達に向けた多様な取組や工夫を積極的に行っていくことが必要です。

(2) 組織・計画の視点

ア 組織づくり

子どもが小学生のうち、保護者も熱心に、地域も、子どもや学校のために支援しま

す。しかし、子どもが中学生になると、「子どものことは学校に任せておいても良い」という意識が強くなったり、「保護者が学校へ来ることを子どもが歓迎しない」といったことから、保護者が学校へ足を運ぶ機会も減るように思われます。このことが、中学校の教職員の負担が減らない一因だとも言えます。

もし、きっちりとした組織やコーディネーター等の配置システムがあれば、教職員の負担は軽減されるかもしれません。今後、学校と地域とが良好な関係を保ち、保護者も負担を感じない仕組みが、地域として子どもを育てるために必要となるでしょう。

また、コーディネーターにより学校と地域の結びつきが増えると、外部のコーディネーターやボランティアは、子どもと知り合う機会が増え、声を掛け合うなど地域の防犯性も高まります。

イ スムーズな運営

コーディネーターには、今までに実施した活動記録を残し、次年度以降に活用できる資料として保管しておくことが望まれます。取組実績のデータベース（記録）があると次年度以降に活動時期や内容が明らかにしやすくなり、学校側への提案もやりやすくなります。また、ボランティアの来校に向けて、「学校行事の調整」等もスムーズに行われるようになります。

また、あわせて、学校だけでなく市・町の教育委員会では、実施後の評価を行い改善につなげることで、マンネリ化を防ぎ、次回からより質の高い取組にしていくことも可能です。

さらに、今までの取組を基礎として、新しい団体・組織を立ち上げる場合には、リーダーの存在が欠かせませんし、既存の自治会区長、PTA、スクールガード、商工会、老人クラブなどの他団体から広く意見をもらうことが大切となります。

ウ 人材の発掘や確保

団体が順調に活動していても、その後を受け継ぐ人が見つからず活動が停滞してしまうことも少なくありません。そのため、人材の発掘、とりわけ将来を支える若い人材の確保が求められます。また、意欲のある人が後を受け継いでいけるようなシステムが必要です。

そのためにも、普段から、ボランティアの募集においても工夫が求められます。例えば、日頃から学校に関わりのある地域住民等を通じた募集、「広報チラシ」や「学校だより」の配布、PTAを通じた募集などが考えられます。また、コーディネーター自身が個人的な人脈を活用し募集を行うことも考えられるでしょう。

大学生のボランティアを活用する場合は、各大学にボランティアサークル等の組織を通じて募集すると、固定曜日・時間帯に人が必要な場合でも活動に来てもらいやすいようです。

各市町でコーディネーターを複数配置し、コーディネーターの研修会を行うと、コーディネーター同士の活発な交流もでき、口コミなどでボランティア登録数は増えるようです。

なお、ボランティアは、日常生活の余力をボランティアへ向けるという柔軟さがないと、継続したボランティア活動につながらないおそれがあります。

(3) 情報共有の視点

学校ならびにコーディネーターやボランティアは、学校支援の効果をしっかりと広報して地域に知ってもらうことが必要です。とりわけ、学校は経営方針や年間計画を示し、地域の人に何をして欲しいのかを知らせていくことが基本です。また、ボランティアの感想も広報誌等を活用して知らせていくことにより、事業内容の啓発として役立っています。

ア 学校から他の学校へ発信

「支援を依頼すると今以上の負担が増える」との先入観を持っている学校が多いようです。

まだまだ学校には、他の学校での取組に関する情報が不足しており、成功例・失敗例も含めて、幅広く情報を知らせることが必要です。他の学校での情報を得ることにより、自分の学校でも取り入れたいという気運が高まることが期待できます。

イ 学校から地域へ発信

学校側から地域へ発信する情報はまだまだ少なく、もっと情報を開示して「〇〇を助けてもらいたい」と言うような具体的な協力を求めることが必要です。地域の人が必要としている情報は、「学校が何に困っており、何を地域の人にしてもらいたいのか」なのです。

また、地域の各家庭に、学校が支援を求めていることや、現在受け入れている支援について発信していくことが大切です。特に、幟旗、帽子等のグッズの利用は、住民に学校の活動だけでなく、学校を支援する団体の存在や活動内容を広く知ってもらうためにも有効です。

ウ 双方向の情報

学校は、地域において、どの人が、どの場面でどのようなことを支援をしていただけるのかという情報を持っていません。一方、地域の側でも、学校は、地域の人に何を協力して欲しいのか、学校で何が不足しているのかが分からずにいます。

お互いがもっとオープンに交流することで、「どの場面で、こういった内容についてお互い協働できるのか」がイメージできるはずです。

(4) まちづくりへの発展の視点

いろいろな分野の団体が互いに連携したり、活動内容や名称を変えたりしながら、地域づくりやまちづくりへ発展しているケースがあります。

とりわけ、新しい組織では、学校や既設の団体などに負担をかけない自主的な取組がなされています。例えば、会員個々が持っている人的ネットワークを活用して活動に必要な物品を自前で調達している例などが数多く見られます。

第3章 学校を中心とした「まなぶ いかす つながる」 地域づくりの可能性

これまで見てきたように、学校を中心とした支援活動は、豊かな地域やまちづくりの可能性を秘めた活動であると言えます。

滋賀県では、平成 23 年 3 月に「つながりで未来を拓く－滋賀の生涯学習社会づくり－」を基本目標とした「滋賀の生涯学習社会づくり基本構想」が策定されました。

そして、この基本目標を達成するために、「まなぶ」、「いかす」、「つながる」という 3 つの柱を立てて、現在、生涯学習社会の実現に向けた取り組みを展開しているところです。特に、人と人、人と社会が「つながる」ことで、家庭や地域の教育力の低下に対応し、生涯学習社会づくりを推進していこうというところに、今回の基本構想の大きな特徴があります。

学校支援活動は、基本構想を具現化する重要な取り組みの一つであり、豊かな地域づくりの可能性を秘めた活動です。今後、学校支援活動を充実させる上で、以下の点を意識した取組を進めることが重要です。

1. 学校支援活動は「三方よし」の活動

かつて近江と呼ばれたこの地に、大切に守り育て未来につないでいくべき先人たちの教えが「近江の心」として今も息づいています。例えば、近江商人の経営理念であり、人と人とのつながりを大切にしてきた「三方よし」の中にある「世間よし」という公の心も今に受け継がれています。

この「三方よし」になぞらえて言えば、地域による学校支援活動は、「学校」に様々な豊かさをもたらすだけでなく、「支援活動を行う側」や「地域社会」にもまた豊かさをもたらすものです。

(1) 学校側にとって

かつては、地域での生活は、子どもが学校で学ぶことができない知識や技能を獲得する場として、一方学校は、読み・書き・計算などの技能や体系的な知識などを習得する場として、それぞれの役割を果たしながら子どもの教育にあたっていました。しかし、都市化や核家族化等の進行により、地域の教育力が低下するとともに、学校現場においては、いじめや非行などの問題行動の深刻化、不登校などの心の問題や体力の低下など様々な課題が山積し、学校の役割は増大し続け、学校が本来果たすべき役割すら果たせない状況が生まれてきました。

地域住民が、学校との協力関係の中で子どもの教育に積極的に関わっていくことは、こうした学校の現状を変え、教員が子どもの教育活動に専念することを可能にします。

また、地域住民がコーディネーターやボランティアとして、学校に日常的に入っていくことにより、教員は学校周辺の地域の実情を知ることができます。教員の多くは、学校のある地域外に居住しているために、子どもたちが生活している地域社会の地理的・経済的・歴史的・文化的な特徴を十分に知っているわけではありません。コーディネーターやボランテ

ィアとの日常的な交流を通して、会話が增えることにより、地域や地域住民の実態を知ることができます。

子どもにとっても、学校支援活動は様々な効果をもたらします。例えば、安全な登下校、手入れされた花壇、授業中のサポートによるきめ細かな指導等、子どもは、安全で快適な学習環境で学校生活を送ることができます。また、学校の中で地域の様々な大人たちに出会い、交流できることは、同学年のつきあいが主である子どもにとって貴重な体験となるでしょう。

(2) 支援活動を行う側にとって

平成18年に教育基本法が改正され、新たに「生涯学習の理念」が位置づけられました（第3条）。この条で、生涯学習の理念は、「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことができる社会の実現が図られなければならない」と規定されたのです。

現在、地域課題の学習にしても、趣味・教養の学習にしても、自分の学習の成果を生かして社会参加をし、自己実現を図りたいという人々が増えています。子どもへの学習支援を行うことは、教室で自分の学習の成果を発表する機会となり得ます。教科に関する学習以外でも、部活動や花壇・グラウンド等の校内整備、学校行事の運営などが、自分の得意な分野の自己表現の場となるのです。また、学校における支援活動が、教職員にとって地域理解の大切な機会となったように、支援活動を行う人にとっても今の教育現場の実態を自分の目で確認し、学校を理解する機会ともなります。

(3) 地域社会にとって

学校は、地域の多くの人何らかの接点を持っている場です。子どもの親であったり、祖父母であったり、あるいはその学校の卒業生であったりするものです。

そういった意味で、学校は地域の多様な世代の人が集まりやすい場であると言えます。そして、その場でそれぞれの経験や知識、技術、興味、関心、意欲に応じて多様な活動を展開することが、その地域の活発な地域づくりにもつながります。

これまで、強い思いを持って学校を支えてきたPTA等の団体や、それぞれのテーマを持って新しい活動を始めた団体など、子どもを取り巻く多くの団体が、それぞれの特色や強みを発揮しつつ、相互に連携・協働していくという視点を持つことが重要です。

2. コーディネーターの養成・研修

学校と地域との連携を進めていく上で、重要な役割を果たすのがコーディネーターです。コーディネーターの働き一つで、両者の関係が大きく変わると言っても過言ではありません。

コーディネーターは、学校の関係者やボランティア自らが直接行うのではなく両者以外の者があたるのが適切でしょう。各校に1名ずつ配置するのも効果的ですが、広域的な連携を行い学校外に配置するという方法も可能です。

また、充実したコーディネートを行っていくためには、コーディネーターの養成・研修の機会の充実も必要でしょう。コーディネーターに必要な知識・技能にはどのようなものがあ

るのでしょうか。国立教育政策研究所社会教育実践研究センターの報告書によれば、コーディネーターに必要な知識・技能の内容には、大きく3つの領域があります。

① コーディネートの技法（コミュニケーションの技法を含む）

人間関係のつくり方やグループへの働きかけ方などのコミュニケーション能力の強化、地域の教育資源（人、団体、施設等）の把握と連携、学校支援ボランティア活動の企画とボランティアへの助言・提案などについての知識・技能の習得

② 学校教育の理解

学校運営の仕組み、子どもの特性、授業のあらまし、学校生活の流れなどについての知識の習得

③ 学校支援ボランティア活動の理解

生涯学習活動の位置づけ、ボランティア活動の実際と留意点などについての知識の習得

これらの中で、コミュニケーションは、コーディネートを円滑に進める上で非常に重要な能力です。外部コーディネーターは、学校支援ボランティアはもとより、教員からも信頼されて、その役割を効果的に果たすことができます。そうした信頼関係は、豊かなコミュニケーションを通して築けるのではないのでしょうか。

3. 学校支援活動から地域づくりへ

こうした活動を通じて、学校と地域双方が相まって発展していくことが、これからの重要な課題となります。

この学校と地域の関係について、文部科学省は「地域とともにある学校づくりの推進」を提案しています。これは、学校が、「地域との協働により、すべての子どもに『生きる力』を確実に身につけさせるとともに、関係する大人たちの成長も促し、学校が地域を活性化させる『場』となる」ことを目指しています。

このようなことを踏まえて、「地域とともにある学校づくり」に求められる視点は、以下の3点と考えます。

（1）多様な人々との触れあいを通じて充実した教育を提供する視点

学校に通う子どもたちにとって、公民館や地域において体験できる場がなくなったわけではありません。しかし、子どもの放課後の過ごし方の多様化や大人とのつながりの希薄化から、子どもが地域の行事や講座等に参加する機会は少なくなってきました。こうした中、学校教育において、地域の自然・産業・文化・芸能等を学んだり、キャリア教育において身近な大人から生き方を学んだりすることを通じて、学校外の人やものを身近に感じることは、子どもたちの豊かな成長につながるでしょう。

（2）大人の生涯学習の場としての視点

「地域とともにある学校づくりの推進」について議論してきた「学校運営の改善の在り

方等に関する調査研究協力者会議」*5は、平成23年に「子どもの豊かな学びを創造し、地域の絆をつなぐ～地域とともにある学校づくりの推進方策～」という提言をとりまとめました。その中で、「大人の学びの場」としての学校について次のように述べています。「地域の人々が集い、活動していく学校では、教職員、保護者、地域住民等が、多様な人々と関わることで、たくさんの人との合意形成の仕方、互いを尊重して共に活動するやり方、信頼関係の結び方などを学ぶ機会が生まれる。こうした営みを促す仕掛けを組み入れることで、学校は、地域の大人が学びあい、共に成長できる場となりうる。」としています。

(3) 学校を中心とした地域づくりの視点

また、先の提言は、「地域づくりの核」としての学校については、「学校は、ほとんどの大人が一度は通ったことがあり、思い出の多い、親しみのある場である。また、学校施設は日本全国、生活拠点に一定の間隔で存在し、多様な活動に対応できる施設・設備があり、常に人が集う場所である。学校は、いわば地域の人々を惹きつけやすい性質を備えていると言える。そこへ、学校が地域の活動拠点となる仕掛けを組み入れることで、学校は、地域コミュニティが結びつきを深める場（地域コミュニティの核）となり、『地域づくりの核』ともなりうる。」と述べています。

今後、こうした視点を重視した取組が進められることで、教職員も、保護者も、地域住民も、多様な人との関わりの中で人間的な成長を遂げていくでしょう。

また、学びあうプロセスの中で、人々のつながりは強まり、地域の活力が高まっていくこととなります。この地域の活性化は、積極的に学校を支援する新たな人材を増やすことにつながり、地域全体に好循環を生み出すことになるでしょう。

*5 『学校運営の改善の在り方等に関する調査研究協力者会議』／「子どもの豊かな学びを創造し、地域の絆をつなぐ」～地域とともにある学校づくりの推進方策～

(平成 23 年 7 月 5 日 学校運営の改善の在り方等に関する調査研究協力者会議 文部科学省)

審議経過

年月日	名 称	内 容 等
H22. 7. 6	第一回滋賀県社会教育委員会議	審議テーマ等について
H23. 3. 8	第二回滋賀県社会教育委員会議	(第一次アンケート) 結果について
H23. 7. 11	第三回滋賀県社会教育委員会議	「学校を中心」とした取組の見学 (ヒアリング) : 湖南市立石部小学校
H23. 7. 16		「学校を中心」とした取組の見学 (ヒアリング) : 大津市立堅田小学校
H23. 11. 9	第四回滋賀県社会教育委員会議	「学校を中心」とした(第二次アンケート) と(ヒアリング)の結果ならびに報告書の 骨子について
H24. 3. 9	第五回滋賀県社会教育委員会議	報告書について

滋賀県社会教育委員名簿

任期 平成22年7月2日～平成24年7月1日

分野	委員名		備考
	氏名	所属	
学校教育関係者	西村 俊一	米原市立大東中学校長	
	宇野 和子	草津市立渋川小学校長	
社会教育関係者	今居 利隆	滋賀県公民館連絡協議会顧問	副委員長
	木ノ内江以子	滋賀県PTA連絡協議会賛助会員	
	野一色 順子	県地域女性団体連合会副会長 平成23年6月2日より	
	千歳 則雄	県公共図書館協議会会長 野洲市立図書館館長	
家庭教育の向上に 資する活動を行う 者	山口 育子	特定非営利活動法人チッチキンダー ガーデン理事長	
学識経験者	神部 純一	滋賀大学生涯学習教育研究センター 教授	委員長
	中野 友博	びわこ成蹊スポーツ大学教授	
	野口 観道	社団法人滋賀県人権教育研究会会長 甲賀市立大原小学校 校長	
	納谷 宏之	納谷塗装工業株式会社 代表取締役	
	宇川 加代子	一般社団法人滋賀県労働者福祉協議会 業務主幹 平成22年12月24日より	
	他谷 恵津子	特定非営利活動法人子育てネットワーク 志賀「うりぼう」代表	
公募委員	富山 郁子	公募による委員	
	松浦 弘美	公募による委員	

お わ り に

近年、情報分野をはじめとする科学技術の著しい進展や、国際化、少子高齢化、核家族化などとともに、人々の価値観やライフスタイルは多様化し、地域における人間関係が希薄になるなど、社会の状況は大きく変化しています。こうした中、社会全体の規範意識が低下しているとも言われ、社会の変化は、教育を取り巻く環境にも大きく影響を与えています。

これまで家庭や地域におのずと備わっていた教育力が低下し、学校の子どもの教育に対する負担がますます大きくなっています。その結果、学校が本来果たすべき役割すら十分に果たせない状況も生まれてきています。一方、今の子どもたちに目を向けると、様々な悩みやストレスを抱える子どもが増加し、いじめや非行などの問題行動が深刻化するとともに、インターネット上には有害な情報があふれ、子どもが巻き込まれる事件や事故が多発するなど、緊急に解決しなければならない多くの問題が生じているのです。

こうした状況の中で、これまで閉鎖的であるとか、知育偏重等と指摘されてきた学校もこれからの時代にどうあるべきなのか、見直しが求められるようになりました。平成8年の中央教育審議会の答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」では、これからの教育が目指すことは「生きる力」育てであり、「たくましく生きるための健康と体力」、「自らを律しつつ、他人と協調し、思いやり、感動する豊かな人間性」、「自ら課題を見つけ、学び、考え、判断して行動する能力」を要素とするバランスの取れた力を身につけることだとししました。また、子どもたちを取り巻く多くの問題が、学校だけの力では解決が困難であることが認識されるにつれ、「開かれた学校づくり」の推進が叫ばれるようになったのです。

学校が地域に開かれるということは、学校という場において、「学校外の社会人を活用」や「様々な専門家と教員との連携」等、地域の教育力を子どもの成長・発達のために生かしていくことを意味します。それは、子どもに豊かな学びをもたらすばかりでなく、地域の人々にも、学校でのボランティア活動や交流を通じて、日常では得にくい様々な学びをもたらすことになります。学校支援活動は、大人にとっての生涯学習活動でもあるのです。さらに、こうした活動の広がりや、地域コミュニティの活性化を促すきっかけともなる大きな可能性を持っているのです。

そこで、今期の社会教育委員会では「学校を中心とした地域連携による生涯学習の環境づくりについて」をテーマとし、学校と地域との連携・協力の中で、子育てや地域づくりを進めるための方策を探るための調査を行いました。そして、その結果を基に審議した結果を報告書としてまとめさせていただきました。

この調査研究で得られた結果を広く県内の園や学校へ紹介・啓発をし、学校教育の充実や住民等の学習成果の活用機会拡充は言うに及ばず地域の教育力の活性化等につなげていただければ幸甚に存じます。

最後になりますが、本調査を実施するにあたり、県下全幼稚園・小学校・中学校の校長先生をはじめ、関係団体の代表者の方には、アンケート記入でお世話になりました。とりわけ、大津市立堅田小学校の校長先生をはじめ「堅小 おや連！」の代表者ならびに湖南市立石部小学校の校長先生をはじめ「学校応援団」の代表者の方々には、お取組を御紹介いただきました。紙面をお借りして感謝し御礼申しあげます。

滋賀県社会教育委員会 委員長 神部 純一

参 考 資 料

◆		◆
＜参考資料１＞	滋賀県社会教育委員の意見から	1
◇	学校と地域のより良い連携に向けての具体的ポイント	1
1.	学校と地域連携を成功させるために	1
(1)	地域と連携した関係づくりのためのポイント	1
(2)	学校に関して	1
(3)	ボランティアに関して	2
2.	総合的なコーディネート構築	2
＜参考資料２＞	研究のための資料等	3
I.	関連する計画等	3
1)	教育基本法	3
2)	中央教育審議会答申	3
3)	滋賀県教育振興基本計画	3
4)	滋賀県社会教育委員会議提言	4
5)	滋賀県教育行政重点施策	4
II-1.	第一次調査（アンケート）「学校を中心」とした取組の調査用紙	5
II-2.	第一次調査（アンケート）「学校を中心」とした取組の調査結果	8
第 1.	自主的に組織した団体の属性	8
1.	自主的に組織した団体	9
2.	主たる団体の数と平均構成人数	10
3.	支援・応援内容	10
(1)	支援・応援内容	10
(2)	取組内容の支援・応援パターン	11
(3)	活動回数の頻度	12
(4)	活動経費の調達先	12
(5)	支援・応援者の保険	12
4.	支援・応援をいただいている団体の概要	13
(1)	支援・応援をいただいている概ねの年数	13
(2)	支援・応援をいただいているその組織が立ち上がったきっかけや理由	13
(3)	学校からの支援依頼と団体からの提案	14
(4)	学校が団体と意見交換する場の設定の有無	14
第 2.	支援や提案を調整するコーディネーター	15
5.	支援や提案（双方向）者	15
(1)	支援や提案（双方向）を調整しておられる方	15
(2)	支援や提案（双方向）を調整しておられる方の立場	15
(3)	支援や提案（双方向）を調整しておられる方の謝金について	15

第3. 地域とのコーディネートを進めるための必要条件	16
第4. 支援を受けてのメリットと問題点	16
6. 支援・提案を受けての成果	16
(1) 支援の依頼や提案を受けて、うまくいっていること	16
(2) 支援の依頼や提案を受けて、問題となる点	16
Ⅲ-1. <(2)-1>第二次調査(アンケート)	
「学校」のために自主的に組織した団体が「ない」理由に対しての調査用紙	17
Ⅲ-2. <(2)-1>第二次調査(アンケート)	
「学校」のために自主的に組織した団体が「ない」理由に対しての調査結果	18
◇ 第一次アンケート調査結果からの質問 (再掲)	18
第1. 既設の団体による「地域に根ざし開かれた学校づくり」の取組の有無	19
第2. 「取り組んでいない」理由の内容	20
Ⅳ-1. <(2)-2>第二次調査(アンケート)	
「学校」のために自主的に組織した団体が「ある」回答に対しての調査用紙	21
Ⅳ-2. 学校のために自主的に組織した団体の活動状況	24
◇ 自主的に組織した団体が「ある」とした調査	24
第1. 団体から聴取した活動の概要	25
(1) 団体名	25
(2) 団体の構成メンバー数	25
(3) 団体の活動年数	25
(4) 活動の中心地	25
(5) 構成メンバーに求められる資格等	25
第2. タイプ別に見た活動の内容等	26
(1) 支援する団体の概要	26
(2) 支援を実施するに至った経緯	26
(3) 活動を活性化するための研修	26
(4) 支援する団体の活動経費の調達	27
(5) 実施・推進体制の仕組み	27
第3. タイプ別に見た学校以外での活動内容等	28
(1) 市町との関わり	28
(2)-①学校以外の場所で(地域で)やっておられる活動の有無	28
(2)-②学校以外の場所で(地域で)やっておられる活動の内容	28
(3) 支援する団体としての活動の状況(回数)	28
(4) 支援する団体のして何か参考にされたことやモデル例	29
第4. タイプ別の活動の工夫点	29

第5. タイプ別の将来に向けての展望	30
1. 今後の取組	30
2. 問題点と課題	30
第6. タイプ別の学校支援の取組成果	31
1. 双方向のコーディネーターの有無	31
2. 取組の成果	31
(1)学校支援への取組の成果(4段階等分割法)	31
(2)学校支援への取組の成果のコメント	31
3. 支援を受けて変容が見られる点 等	34
4. タイプ別の広報の方法	36
(1)団体の広報の有無	36
(2)広報の仕方	36
V. タイプ別の実践例(第三次調査(ヒアリング))	37
1. タイプ別調査対象内容	37
(1) 特色ある活動内容	37
(2) コーディネートする人が他にいる	37
2. タイプ別調査対象校の概要	37
(1) 訪問校等	37
(2) タイプ別の見学・ヒアリング内容のポイント等	38
3. タイプ別のヒアリングの結果	39
(1) 「特色ある活動内容」の場合	39
① 「堅小 おや連！」の活動成果	39
② 「堅小 おや連！」の課題について	39
③ 地域連携を成功させるために	39
(2) 「コーディネートをする人が他にいる」場合	39
① 学校応援団の活動成果	39
② 学校応援団の課題について	39
③ 地域連携を成功させるために	39
◇【資料】＜実践例＞	40
◇「特色ある活動内容」場合	40
1. 「堅小 おや連！」の概要	40
(1) 「堅小 おや連！」の願い	40
(2) 「堅小 おや連！」の内容	40
(3) 「堅小 おや連！」の組織	41
(4) 活動実績	41
2. 活動成果	41
3. 課題について	42
4. 今後に向けて(地域連携を進めるために)	42

◇「コーディネートする人が他にいる」場合	43
1. 「学校応援団」の概要	43
(1) 「学校応援団」の願い	43
(2) 「学校応援団」の内容	43
(3) 「学校応援団」の組織(しくみ)	44
(4) 活動実績	44
2. 活動成果	45
3. 課題について	45
4. 今後に向けて(地域連携を進めるために)	46

＜参考資料 1＞ 滋賀県社会教育委員の意見から

◇学校と地域のより良い連携に向けての具体的ポイント

1. 学校と地域連携を成功させるために

(1) 地域と連携した関係づくりのためのポイント

- ① 地域との連携を通じてどのような学校づくりを進めていくかといった学校側の思い（ビジョン）を分かりやすく地域に伝える。
- ② 学校管理職による趣旨の理解と教職員への理解・協力の周知が必要。地域の人が入っていただくことにより精神的にも肉体的にも楽になることを伝える。
- ③ 学校は何に困っていて、ボランティアにどのようなことをして欲しいのか。学校側のニーズを明らかにすることが出発点である。
地域からのシーズがあった場合には、話を聞き、すぐに断るのではなく、学校の学習計画の関係もあるので、機会があれば活用してみるぐらいの心の余裕が欲しい。
- ④ 地域の方が学校に來られている場合は、その存在を学校の教職員が把握しておくことが必要である。
- ⑤ 中学生だけでなく小学校高学年でも、支援をする側として地域に出て行くには十分な人材である。とりわけ、普段のトレーニングや訓練が十二分に生かされ、震災時では、十分にその力は発揮されたという実例がある。
- ⑥ 学校のために組織された団体が、子どもだけでなく保護者とも関わりたいとのことで、新たな組織が生まれ名称を変え、地域清掃や地域行事に子どもとともに参加しているという事例がある。
- ⑦ 実施後の評価を行い、マンネリ化を防ぎ、より質の高い取組にしていくことが必要。

(2) 学校に関して

- ① コーディネーターの存在を職員会議やPTA総会で説明する。コーディネーターは、教職員を対象とした研修にも入り、教職員の悩みに耳を傾けることも必要。
- ② コーディネーターやボランティアを交えた会合に、学校側も参加して意見交換をするとう良い。
- ③ コーディネーターやボランティアとの連絡担当者を校務分掌で位置づけている。
- ④ ボランティアの決まった時間の活動スペースが必要である。
- ⑤ 広報を通じて学校の変化を知らせる。
- ⑥ コーディネーターには、学校のことを知ってもらうために、常に連携を密にする。
- ⑦ ボランティア募集に様々な方法で関わっていく。学校としても学校だよりなどを通じてボランティアを募集するなど、学校としての人脈を活用すると運用がしやすい。
- ⑧ コーディネーターやボランティアには礼節と感謝で接する。
- ⑨ 経営方針だけでなく年間計画を示すことが良い。

(3) ボランティアに関して

- ① ボランティアがふと立ち寄れるようなスペースの確保があれば良い。
- ② 活動の成果を広く発信されると良い。
- ③ ボランティアが活動日誌の中で一言感想や気づきを書けると良い。
- ④ コーディネーター主催でボランティアの研修会が行われると良い。
- ⑤ 誰もが会員になれば、参加でき、自らが楽しむ意識を高める必要がある。
「やっていて楽しい」「いつでも気楽にできる」「できる人が できる時に できることを」することが必要である。また、「あなたも何かできることをやってみませんか？」という気楽さが必要。
- ⑥ 子どもとの触れあいにより生き甲斐が得られると良い。
- ⑦ 行政や学校の下請けにボランティアがならないことが必要である。

2. 総合的なコーディネートの構築

- ① ボランティアには、長続きしようと思えば、「いつでも やれる時に やれることを」で良い。日常生活の余力をボランティアへ向け、学んだことを楽しみながら新しい組織をつくるという緩さが必要である。（「知の循環型社会」）
- ② コーディネーターにより学校と地域の結びつきが増えると、子どもや大人の顔見知りが多く、地域の防犯性もあがる。
- ③ 旧町単位で、役所や公民館にコーディネートされる方がおられると、継続的にボランティア支援などが行える。
- ④ 教育委員会などが、コーディネーターのコーディネーター、いわゆるトータルコーディネーターの役割を担っていただけるとありがたい。
- ⑤ ボランティア募集を個人的な人脈に頼ることで、ボランティアとコーディネーターとがお互いに助け合える関係となり、動きやすい。
- ⑥ 頻繁に学校を訪問し教職員の「日常の気づき」を汲み取るとともに、何に困っているのか相談に努めることが必要である。打合せ時間の確保が必要ではあるが、教職員との会話が取れない場合は、交換ノートやコーディネーターボードの設置も有効な手段である。
- ⑦ 学校などに提案などをして、大いに学校と地域をつなぐ役割が期待できる。
- ⑧ 取組実績のデータベース（メモ）があると次年度以降に運営がやりやすくなり、学校側への提案がしやすい。
- ⑨ ボランティアの感想も広報誌を活用して啓発をすると、地域に実態が分かってもらいやすい。
- ⑩ 市町でコーディネーターを複数配置すると、コーディネーター間の交流もできボランティア登録数も増える。
- ⑪ 毎日ボランティアも含めて振り返りの時間を持てると、次回に生きる。
- ⑫ 社会教育を体験できる場がなくなったわけではなく、子どもの放課後の過ごし方の多様化や大人のつながりの希薄化から、子どもの参加が少なくなった。身近な大人から生き方を学んだりすることを通じて、学校外の人やものを身近に感じる、生涯学習への足掛かりになる。

＜参考資料 2＞研究のための資料等

I. 関連する計画等

1) 教育基本法

※引用：平成18年『生涯学習の理念』（第3条）

国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に活かすことのできる社会の実現が図られなければならない。

※引用：平成18年『学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力生涯学習の理念』（第13条）

学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする。

2) 中央教育審議会答申等

※引用：平成20年「新しい時代を切り拓く生涯学習の新興方策について ～知の循環型社会の構築を目指して～」第2部 施策を推進するにあたっての行政の在り方の「2. 今後の行政等の在り方ー生涯学習振興行政・社会教育 行政の再構築」中央教育審議会答申

（1）国、都道府県及び市町村の任務の在り方等（抄）

（国、都道府県及び市町村の任務）

○各個人の学習の成果が社会において実際に活用され、社会教育やそれを通じた学習の意義を実感できるような環境を整備することは生涯学習の理念の実現の上で重要である。また、地域の教育力の向上のために、学校・家庭・地域が協力した地域ぐるみの教育活動等の重要性は高まっており、社会教育が積極的に地域における子どもたちの健全育成等を支援することが求められているのは前述のとおりである。したがって、学校を支援する活動等の地域における教育活動等、地域住民が学習の成果をいかして活動する機会の提供を社会教育行政の任務として明確に位置づけることは、このような取組を推進する上で必要である。特に、これまでも学社融合等の重要性については指摘されてきたものの、学校の支援等については、学校教育行政との関係で社会教育行政の役割が必ずしも明確にされてこなかったが、社会教育行政が積極的に担う役割があることを明確にすることは、地域における取組を制度的に後押しする上で意義があるものであり、今後、社会教育行政の新たな積極的な展開を図っていく上で極めて重要である。

3) 滋賀県教育振興基本計画

※引用：平成22年「滋賀県教育振興基本計画」滋賀県教育委員会 第4章から抜粋

滋賀県教育振興基本計画では、第4章において「計画推進のために必要な事項」として「学校、家庭及び地域等の相互の連携協力」に言及しており、とりわけ「総合的なコーディネートづくり」の必要性があるとしている。

第4章 計画推進のために必要な事項（抄）

「1 学校、家庭及び地域等の相互の連携協力」

計画推進のためには、県民一人ひとりが自らの立場で子どもたちの教育を考え、自らができるところに参画し、行動することが重要です。また、県民の参画のもと、学校、家庭、地域、団体・NPO、企業等が、それぞれの役割を果たしつつ、相互に連携して、社会全体で子どもの育ちを支えあい、子どもたちが育つ環境をつくることによって、教育の目標を達成するための諸施策をより強力に進めることができると考えられます。

（5）総合的なコーディネートの仕組み

教育にかかわる学校、家庭、地域、団体・NPO、企業等が、相互に連携して、より大きな教育的効果を生み出すには、それぞれをつなぎ、連携をサポートすることが必要となります。

例えば、家庭教育や子育てを支援するネットワークや拠点づくり、家庭教育協力企業協力制度、子どもたちの安全を守るボランティア制度など、様々な取組が進められつつあります。

こういった仕組みは、行政の所管分野に基づいて構成されがちですが、子どもの育ちには、特に、教育・福祉・労働分野の連携が欠かせず、多様化する県民のニーズや課題に対応するためには、人材育成や情報提供などを通じて、分野を超えて総合的なコーディネートができる仕組みをつくっていく必要があります。

4) 滋賀県社会教育委員会提言

※引用：平成22年「住民同士が学びあい、住民相互が支えあう地域のきずなづくり（提言）」

滋賀県社会教育委員会議 3・4から抜粋

平成22年3月にとりまとめられた本会議の提言『住民同士が学びあい、住民相互が支えあう地域のきずなづくり』には、重要性ならびに方向性の一つとして「学校を拠点とした地域連携と新たな学校運営の創造」について言及している。

3 具体的な取組の方向性（抄）

(1) 学校を拠点とした地域連携と新たな学校運営の創造

さらに、学校が地域から支援を受けるだけでなく、地域の学びや交流の場を提供することが地域のきずなづくりを進める上で重要である。

学校を地域の拠点として地域の様々な人たちが交流し、子どもの育ちに関わることを進めるため、以下の項目の推進が必要である。

○PTA、地域住民、企業、団体・NPO関係者が学校への関心と理解を深め、連携ができるよう、各学校における体制整備と支援者のネットワークが広がるための支援を行う。

中略

○行政における学校教育と社会教育の連携・協力を進める。

4 おわりに

地域のきずなづくりを進めるため、具体的な取組の方向性で挙げた、学校や社会教育施設の地域との連携やまちづくり機能の充実、また、様々な活動主体が連携してのまちづくり、そして、連携を進めるためにコーディネートシステムの機能充実が重要と考える。

5) 滋賀県教育行政重点施策

※引用：平成23年度『滋賀県教育行政重点施策』「基本目標を達成するための3つの観点」

滋賀県では『未来を拓く心豊かでたくましい人づくり ～みんなで支えあい自らを高める教育の推進～』を基本目標にし、「子どもたちの「生きる力」を育む」「社会全体で子どもの育ちを支える」「学びあい、支えあう生涯学習社会をつくる」の3つの観点で取組んでいます。

(1) 「子どもたちの「生きる力」を育む」

子どもたちが、生きていることの喜びと感謝を感じ、その上で、生涯にわたり学習活動持续开展、社会の一員として個性を伸ばしながら成長していくための基礎を身につけられるよう、信頼される学校づくりを進め、教育力を高めながら、子どもたちに「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育むとともに、「近江の心」を受け継ぐ人を育てるため、「滋賀の自然や地域と共生する力」を育む教育に取り組めます。

(2) 「社会全体で子どもの育ちを支える」

家庭や地域の教育力の向上を図るとともに、学校、家庭、地域、企業等がそれぞれの役割に応じて力を発揮し、互いに連携・協力して、社会全体で子どもの育ちを支える環境づくりを進めます。

(3) 「学びあい、支えあう生涯学習社会をつくる」

県民一人ひとりが、生涯を通して主体的に学び、この学びの成果を自らの生活や仕事に活かすことによって、心豊かでいきいきと自立した人生を築くとともに、世界的な視野を持って、地域において互いに連携しながら様々な課題の解決を図っていく「生涯学習社会づくり」を目指します。

Ⅱ-1. 第一次調査(アンケート) 「学校を中心」とした取組の調査用紙

「学校を中心」とした取組の調査用紙

NO. 1

貴校の名称ならびに記載者職(管理職)・名を教えてください。(※) 種別に○をしてください。

* 私・国・市・町 立 * 園・小・中 記載者職・名 .

注) それぞれの校では、地域の力を借りて校の運営がなされていると思います。その中でも特に、貴校の支援のために保護者・地域住民等が自主的に組織した団体についてお尋ねします。

また、あてはまる回答番号に○をお願いします。

問1 貴校の支援のために保護者・地域住民等が自主的に組織した団体はありますか。

(例) おやじの会、〇〇小を支える会、〇〇読み聞かせボランティア など

なお、既設のPTAならびに学校支援地域本部等は除きます。

また、「①ある」場合は、()に存在する団体数を記入願います。

①ある() ②ない

※ 問1で「②ない」と答えた方は、その理由を以下から選んでください。

理由 ①地域に団体がない。

②積極的に地域に支援を求めている。

③現在、地域からの提案がないので、今後は積極的に支援を求めていく。

④その他()

アンケートは終わりです。その旨を、県までTEL、FAX、E-mailのどれかの方法で回答願います。＜例＞「問1②ない、理由②」とお答えください。なお、「④その他」とお答えされた場合は、その理由をお聞かせいたします。

なお、FAXでの回答の場合は、調査用紙NO. 1のみの返送で結構です。

(エル)

TEL 077-528-4654

FAX 077-528-4962

E-mail ma06@pref.shiga.lg.jp

◇問1で「①ある」と回答された場合は、問2から問7までお答えください。

問2 主たる団体名を〔A〕～〔F〕にご記入ください。
また、おおよその構成人数を（ ）にご記入ください。

〈例〉〇〇小を支える会（13人）

[A] ()	[B] ()	[C] ()
[D] ()	[E] ()	[F] ()

問3 「問2」で記述された団体について、下の内容について答え、欄中にお答えください。

- (1) 学校にどのような内容で支援・応援をしていただいていますか。「◇『記入』」に際して(1)【内容】の選択肢①～⑪から選んでください。
- (2) 特色のある取り組みをしておられましたら、団体名ごとに自由に記述ください。
- (3) 活動回数については、「◇『記入』」に際して(3)【活動回数】にしたがい記入ください。
- (4) 活動経費の調達方法については、「◇『記入』」に際して(4)【活動経費の調達方法】にしたがい記入ください。
- (5) 支援・応援していただく方の保険については、「◇『記入』」に際して(5)【支援・応援していただく方の保険】にしたがい記入ください。

グループや団体名	(1) 内容(複数回答可)	(2) 特色ある取組内容	(3) 活動回数	(4) 活動経費の調達	(5) 支援・応援者の保険
A					
B					
C					
D					
E					
F					

◇『記入』に際して

(1) 【内容】の選択肢(複数回答可)

- ① 生活・学習支援
- ② 読み聞かせ・読書活動支援
- ③ 図書室整備
- ④ クラブ・部活動指導
- ⑤ 校内環境美化
- ⑥ 登下校の子どもの安全確保
- ⑦ 学校行事等の運営支援
- ⑧ 園児・児童・生徒への指導補助
- ⑨ クレームへの対応
- ⑩ 広報・啓発活動
- ⑪ その他

(3) 【活動回数】

〈例〉1回/週、2回/学期、不定

(4) 【活動経費の調達方法】

〈例〉無償、後援会、市町、各団体持ち 等

(5) 【支援・応援していただく方の保険】

〈例〉同窓会、市町、各団体持ち、なし 等

NO. 3

問4 「問2」で記述された団体について下の内容について答え、欄中にお答えください。

- (1) 「支援を受けている概ねの年数(いつごろから学校にかかわってもらったのか)」をお答えください。
- (2) 「その組織が立ち上がったきっかけや理由」をお答えください。
- (3) 貴校からそれぞれの団体に支援をお願いする、あるいは逆に団体から支援の提案を受けることはありますか。それぞれの欄にある場合は「○」を、ない場合は「×」を記入ください。
- (4) 貴校では、「問2」で記述されたそれぞれの団体と学校間で意見交換する場が設定されていますか。ある場合は、＜例＞にしたがい回数を、ない場合は「×」を記入ください。

設問 グループや 団体名	(1) 支援を受けて いる概ねの年数	(2) その組織が立ち上がったきっかけや理由	(3) 支援と提案		(4) 意見交換をする場の設定 ＜例＞1回/週、2回/学期、不定
			貴校→団体へ	団体→貴校へ	
A					
B					
C					
D					
E					
F					

問5 貴校や支援団体の人以外で両者の間に入って、支援や提案を調整しておられる方はおられますか。おられる場合は「○」と「どのような立場の人」かを、おられない場合は「×」を記入ください。また、その方の謝金については、どのようにされておられるか分かる範囲内でお答えください。

＜支援や提案を調整しておられる方の有無＞ ----- ＜どのような立場の人＞	＜謝金＞
--	------

問6 地域とのコーディネートをうまく進めるにはどのような条件整備が必要だと思いますか。自由に記述ください。

問7 下記の観点で具体的に自由記述ください。

団体への支援の依頼や団体からの支援の提案を受けて、うまくいっていることは何ですか。また、問題となる点がありますか。

(うまくいっていること)	(問題となる点)
--------------	----------

質問は以上です。ご協力、ありがとうございました。FAXを『滋賀県教育委員会生涯学習課』へ送付ください。また、主たる団体に分かる資料がありましたら同時にFAXをお願いします。

Ⅱ-2. 第一次調査(アンケート) 「学校を中心」とした取組の調査結果

◇学校のために保護者・地域住民等が自主的に組織した団体の現状

第1. 自主的に組織した団体の属性

- 自主的に組織した団体は、小学校で多く設立されている。
- 分類別では、「読み聞かせ」等の支援分野が主流で5～7年支援が継続。次に「登下校立番」などの「環境サポーター型」が多数。
- 平均40人程度の組織が多数。
- 団体の支援は、学校が団体に依頼すればほとんどで対応。団体が提案すれば学校の半数でのみ許可。活動経費、とりわけ保険代が不足。

※ 対象となった学校数(県内全幼稚園、小学校、中学校対象)及び回収率

幼稚園<186/189園>98.4% 小学校<231/233校>99.1% 中学校<103/106校>97.2%

<回収率98.5%>

<調査項目>

・事業全体の内容の把握

	項 目	内 容
①	事 業	・学校を支援・応援する団体や組織の有無
②	名 称	・支援・応援する『団体や組織』の名称
③	取組状況	・支援・応援ならびに特色ある取組の内容 ・活動回数 ・活動経費 ・保険
		・支援を受けている年数 ・立ち上げのきっかけ・理由 ・支援と提案 ・意見交換をする場の設定
④	コーディネーター	・コーディネーターの有無 ・どのような立場 ・謝金
⑤	双方向システム	・成功させるための条件整備
		・成功例と失敗例

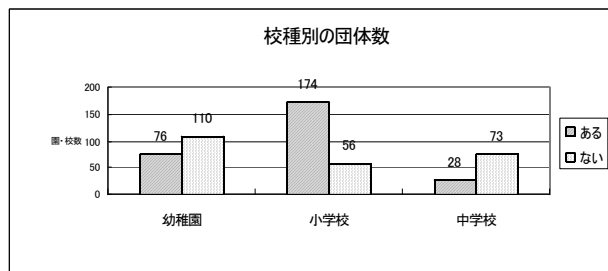
1. 自主的に組織した団体

＜問１＞貴校の支援のために保護者・地域住民等が自主的に組織した団体はありますか。

○自主的に組織した団体は、小学校で多く設立されている。

○「ない」のは、既設の団体に「学校支援地域本部」「PTA」があり、また「個人」がいるからで、今後は「地域からの提案がないので、積極的に支援を求めていく」との回答あり。

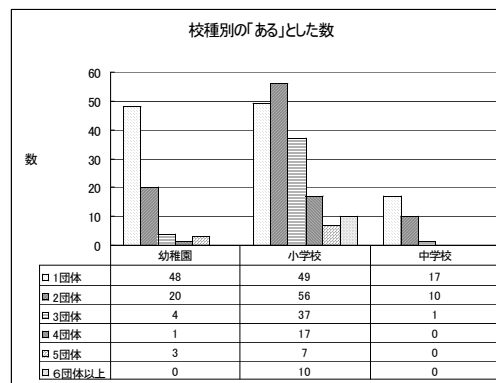
(1) 校種別の団体数



	ある	ない
幼稚園	40.9	58.2
小学校	75.6	24.3
中学校	27.2	72.8

(%)

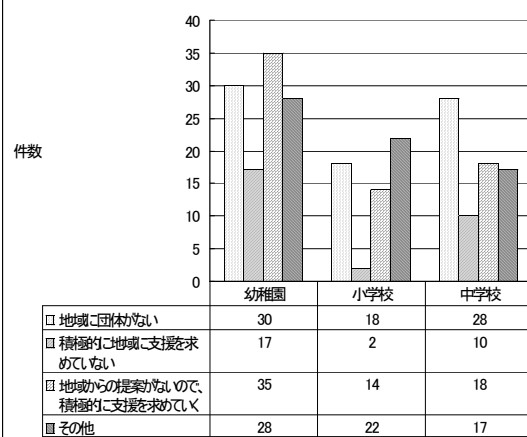
(2) 校種別の「ある」とした数



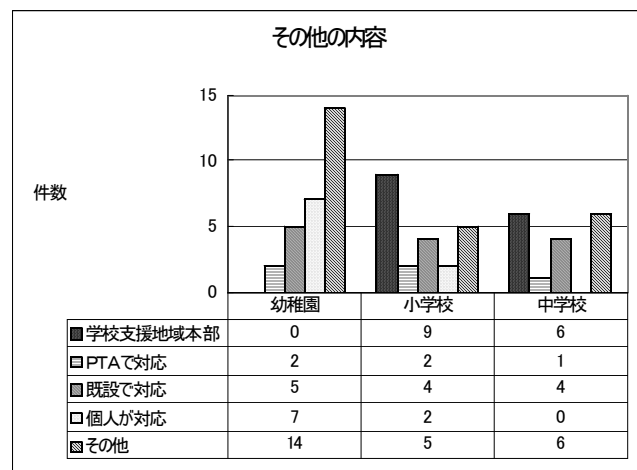
(3) 団体が「ない」理由

項目	全体比率	幼稚園	小学校	中学校
地域に団体がいない	31.8%	27.0%	32.1%	38.4%
積極的に地域に支援を求めている	14.2%	15.5%	3.6%	13.7%
地域からの提案がないので、積極的に支援を求めていく	25.9%	31.8%	25.0%	24.7%
その他	28.0%	25.5%	39.3%	23.3%

団体が「ない」理由



(4) 「ない」理由で「その他」を選択した内容



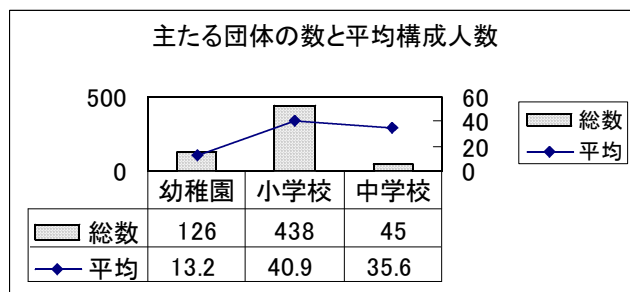
※その他……検討中、両立が難しい

2. 主たる団体の数と平均構成人数

＜問2＞主たる団体名、また、おおよその構成人数をお答えください。

○県内の校種別の団体の総和は、小学校438団体、中学校45団体であった。

○平均構成人数は、小学校で40人、中学校で35人であった。



3. 支援・応援内容

＜問3＞(1)学校にどのような内容で支援・応援をしてもらっていますか。

(2)特色ある取り組み内容をお答えください。

(3)活動回数・活動経費の調達方法、支援・応援していただく方の保険代の調達先は。

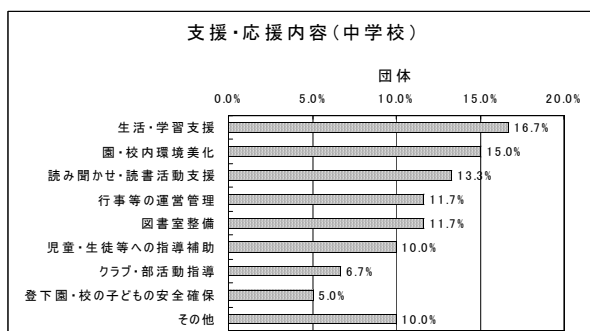
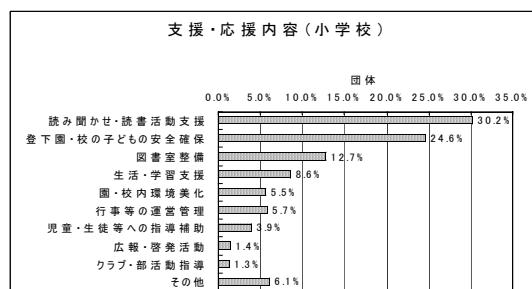
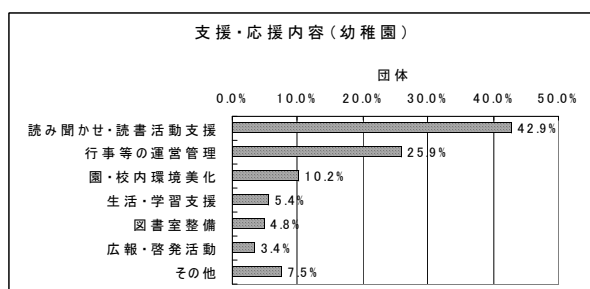
○幼稚園では、「読み聞かせ・読書活動支援」が中心。小学校では、「読み聞かせ・読書活動支援」「登下校の子どもの安全確保」が中心。中学校では、「生活・学習支援」「環境美化」が中心であった。

○活動支援タイプ別の取組内容は、校種に関係なく「学習へのアシスタント」が多数。

○活動回数は、定期的でなく不定が多い。

○活動経費の調達では、とりわけ、支援・応援いただく方の保険代の調達が難しい。

(1) 支援・応援内容



(2) 取組内容の支援・応援パターン

～日本大学 佐藤晴雄先生の「学校支援の活動タイプ」を参照に分類～

取組内容の活動支援タイプ別の団体数の割合

	施設メンテナー型 ○専門性を発揮しながら、施設や設備の維持管理を支援する。	環境サポーター型 ○安全で快適な学習環境を整える。	ゲストティーチャー型 ○子どもたちの学習の理解を深めるために、直接、学習指導をする。	学習アシスタント型 ○子どもたちの学習活動を効率よく進めるために、教師の指導を手助けする。	その他
幼稚園	6.6	7.9	13.2	(読み聞かせ) 67.1	5.3
小学校	5.6	(安心・安全立番) 36.8	6.5	(読み聞かせ) 48.7	2.4
中学校	20.0	20.0	17.8	(生活・学習支援) 42.2	0.0

(※ 幼稚園126団体、小学校438団体、中学校45団体) (%)

学校支援の活動支援タイプ別の支援内容

	施設メンテナー型	環境サポーター型	ゲストティーチャー型	学習アシスタント型
幼稚園	・園庭樹木の葉狩りと除草 ・啓発紙の発行 ・壁面飾り ・ペットボトルキャップの収集 ・誕生会や「ありがとう、さようなら会」会の運営	・花いけ ・絵本の整備 ・親子の遊び場の保障 ・補修 ・保育参観の託児 ・未就園児の子育てボランティア ・椅子カバーの制作 ・絵本修理 ・手作りおもちゃの製作 ・ままごとハウスの製作 ・行事等の保護者サポート	・人形劇 ・コーラス ・プロ演奏家による演奏 ・指人形 ・寸劇 ・手話 ・ゲートボール指導 ・わらべうた ・マジック ・お話し会	・餅つき ・科学遊び ・園外保育の引率 ・お芋パーティー ・ゲーム ・合奏や歌、ペープサート
小学校	・ホームページの更新 ・ビオトープ管理 ・遊具の修理 ・芝生の維持管理 ・樹木の伐採 ・運動場の整理 ・休み時間のPC教室の管理	・手作り絵本 ・図書館整備 ・青パトによる巡回 ・安全マップの作成 ・玄関の生花 ・蔵書新規登録 ・土曜日の子どもの居場所づくり・道徳教材の作成 ・トイレの掃除 ・交通安全啓発イラスト作成・マムシ対策安全環境整備作業 ・ラベル貼り ・雑巾の贈呈 ・本の修復 ・通学合宿の実施 ・正月用門松の制作と設置 ・花壇や教材園の土作り	・人形劇 ・寸劇 ・昔遊び ・紙芝居 ・昔のくらし ・全校コーラス指導 ・栽培指導 ・ニュースポーツの支援 ・アオバナ体験 ・野菜の栽培 ・グランドゴルフ ・昔のおかしづくり ・農園活動の指導 ・スポーツの体験活動の提供 ・パネルシアター ・スキー指導 ・しめ縄づくり ・材料の飼育と観察 ・部落解放にむけての講演	・親子流しそうめん ・稲作支援の学習 ・三世代交流支援 ・環境学習の補助 ・ひょうたん栽培と加工 ・夏休みの学力補充教室 ・外国語指導補助 ・ハロウィンの催し物 ・退職教員による算数の学習支援 ・ミシン補助 ・赤米のプロジェクト ・梅干しづくり ・大型紙芝居作成 ・びわこ水泳のサポート ・老人クラブとの交流 ・調理実習補助 ・夏期休暇中、希望児童に学習支援・補助の実施 ・ゴムひこうき飛ばし大会
中学校	・除雪 ・茶室の管理 ・体育館内側壁面塗装 ・木製ロッカーの修繕	・夜間のパトロール ・居場所づくりの図書館運営	・創立者について学ぶ講演会 ・認知症啓発講座 ・米づくり ・茶道教室	・選択家庭科の伝承工芸補助 ・学力補充・折り紙 ・国語の授業でブックトーク ・大学生の学校行事補助
その他	・母親同士の学び合う場 ・ステップアップセミナー	・お化け屋敷 ・教育推進への提言 ・教育相談 ・学校評価の記載	・地域のまつり出店 ・夢を語る	・学校開放事業

(3) 活動回数の頻度

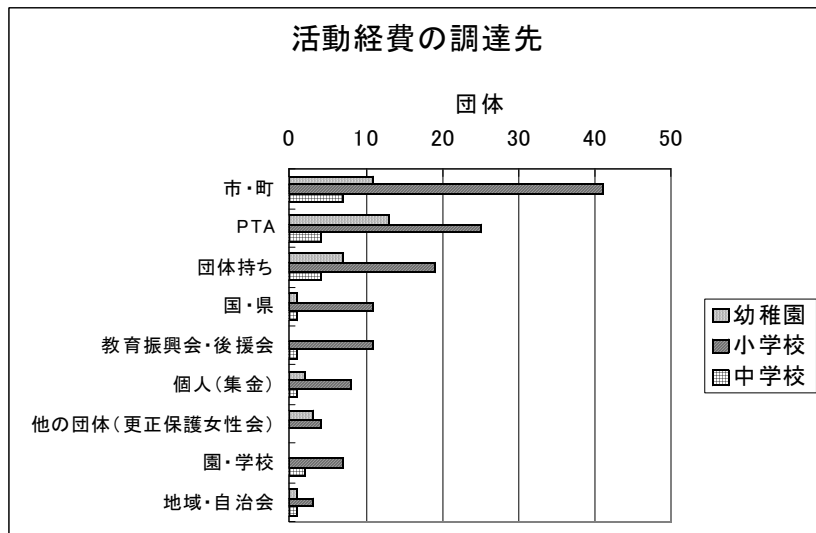
活動回数の頻度

	毎日	数回／週	数回／月	数回／年	随時	不定	その他
幼稚園	1.1	0.0	1.1	38.3	3.2	54.3	1.1
小学校	6.3	6.0	7.3	27.2	2.2	54.7	0.3
中学校	2.2	0.0	8.9	35.6	0.0	48.9	4.4

(%)

(※ 幼稚園126団体、小学校438団体、中学校45団体)

(4) 活動経費の調達先

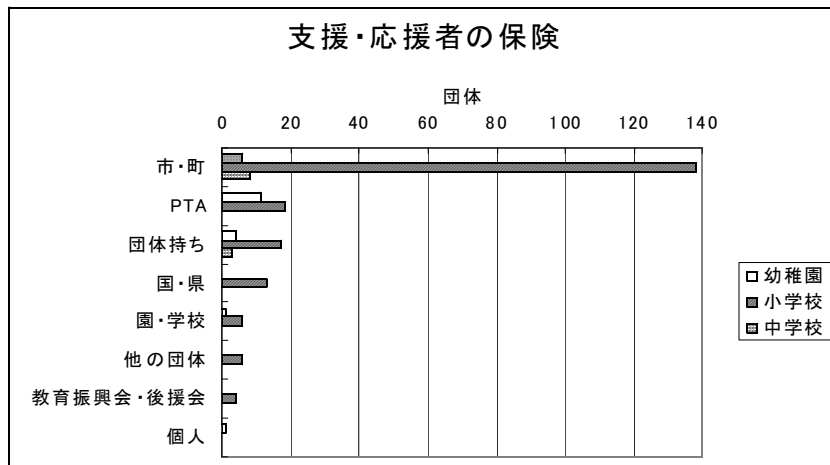


校種	有	無
幼稚園	30.2	69.8
小学校	29.5	70.5
中学校	46.7	53.3

(※ 幼稚園126団体、小学校438団体、中学校45団体)

(%)

(5) 支援・応援者の保険



校種	有	無
幼稚園	18.3	81.7
小学校	46.1	53.9
中学校	24.4	75.6

(※ 幼稚園126団体、小学校438団体、中学校45団体)

(%)

4. 支援・応援をいただいている団体の概要

＜問4＞(1)支援を受けている概ねの年数はどうですか。

(2)団体組織が立ち上がったきっかけや理由はどうですか。

(3)学校からそれぞれの団体に支援をお願いするや、支援の提案を受けることはありますか。

(4)団体と学校間で意見交換する場が設定されていますか。

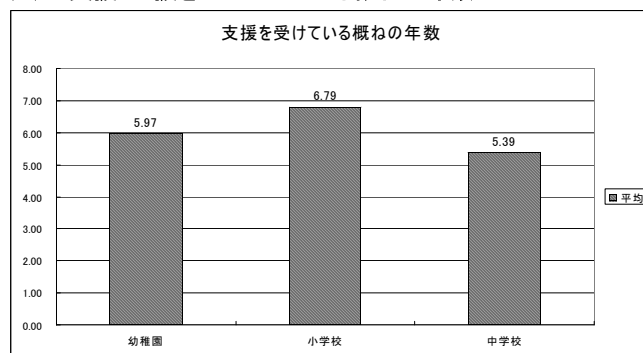
○支援・応援をいただいている年数は、平均して約6年目。

○「新規に立ち上がった団体」が幼稚園・小学校が多い。中学校では、既成の団体の活用が多い。

○学校が団体に支援依頼をする件数は、団体が学校に提案する件数より多い。
お互いが支援を依頼したり・提案したりを受け入れているのは、小中で半数。

○学校が団体と意見交換する場は、8割以上であるとした。

(1) 支援・応援をいただいている概ねの年数



(2) 支援・応援をいただいているその組織が立ち上がったきっかけや理由

立ち上がった団体の分類別数

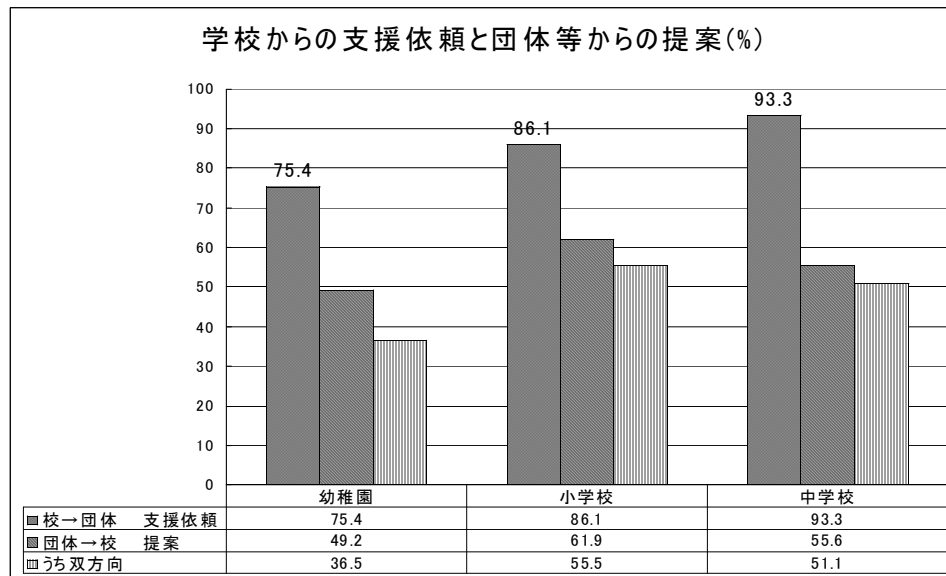
	新規に立ち上がった団体		既にあった団体の活用		その他
	自発的	学校・市町の依頼	PTA活動より	その他の団体	
幼稚園	53.8	9.0	11.5	7.7	17.9
小学校	60.3	14.1	3.8	5.4	12.5
中学校	29.6	22.2	18.5	11.1	14.8

(※ 幼稚園126団体、小学校438団体、中学校45団体) (%)

立ち上がった団体の詳細な内容

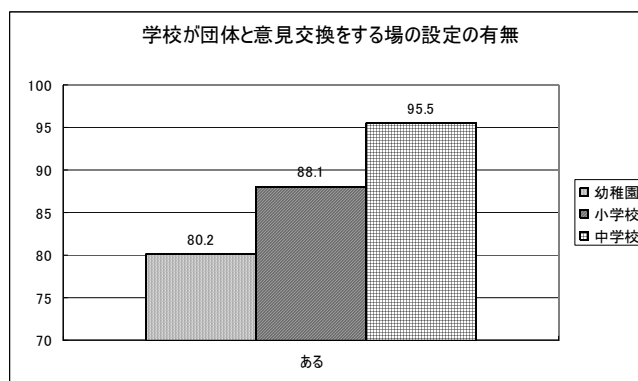
	新規に立ち上がった団体		既にあった団体の活用	
	自発的	学校・市町の依頼	PTA活動より	その他の団体
幼稚園	・地域の有志(牽引者)による ・聞く力・話す力を身につけさせるため ・保護者同士の語らいの場の設置するため ・子どもに読書の喜びを知らせるため ・父親が集まり、子どもの机など修理したこと	・幼小連携の一環から市による	・元保護者がPTA役員で、卒園後に立ち上がった	・既設の団体であった
小学校	・登下校の安全を守るため ・読書意欲を高めるきっかけづくりのため ・子どもたちに体験学習を付けさせる・子どもを巡る事件をきっかけにするため	・学校からの呼びかけによる ・異年齢交流の必要性を市が進めるから	・PTA環境部が教育環境の充実のために継続した	・地域にあったサークルを利用して
中学校	・生徒の学力定着のため ・新しい学校づくりのため ・「あいさつで始まる学校づくり」のため	・市の青少年健全育成のため ・地元大学との連携のため	・歴代PTA会長が発足した ・PTA活動がボランティアへ移行した	・伝承工芸を生徒に伝承するため
その他	・法人化による ・子どもの減少による ・全国的風潮 ・社会的情勢 ・学校の開校に合わせ ・不明			

(3) 学校からの支援依頼と団体からの提案



(※ 幼稚園126団体、小学校438団体、中学校45団体)

(4) 学校が団体と意見交換をする場の設定の有無



学校が団体と意見交換をする頻度

	毎日	数回／週	数回／月	数回／年	随時	不定	その他
幼稚園	1.9	0.0	3.9	25.2	2.9	54.4	11.7
小学校	0.3	4.1	5.2	33.9	1.9	48.9	5.7
中学校	3.0	0.0	6.1	15.2	6.1	69.7	6.1

← ・ノートでの連絡
・来校時に対応

(※ 幼稚園126団体、小学校438団体、中学校45団体) (%)

第2. 支援や提案を調整するコーディネーター

○学校と団体とをつなぐコーディネーターの謝金の調達は難しい。

5. 支援や提案(双方向)者

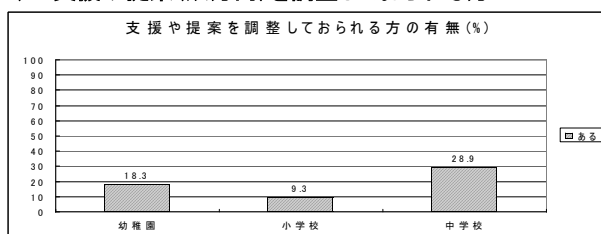
＜問5＞学校や団体の人以外で両者の間に入って、支援や提案を調整しておられる方はおられますか。
また、その方の謝金はどうにされていますか。

○支援や提案を双方向でされている人は、割合として中学校に多い。

○双方向でされている人は、「まちづくり協議会、地域コーディネーター、学校運営協議会」会員が多い。公民館職員など市町職員が係わっているケースもある。

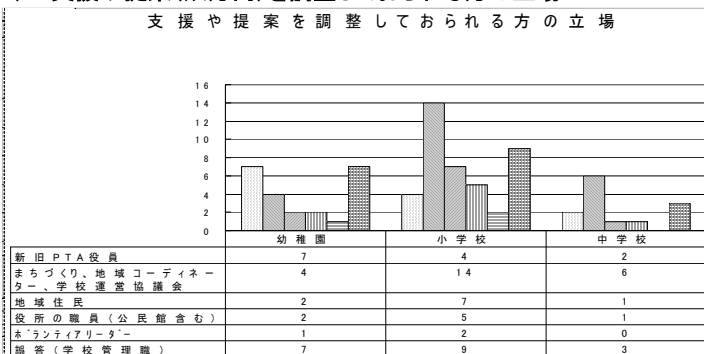
○双方向でされている人の謝金の調達は難しいのが大半である。

(1) 支援や提案(双方向)を調整しておられる方

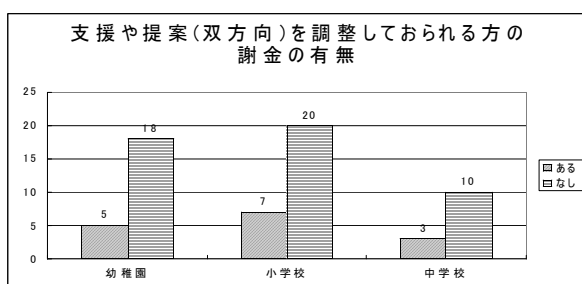


(※幼稚園126団体、小学校438団体、中学校45団体)

(2) 支援や提案(双方向)を調整しておられる方の立場

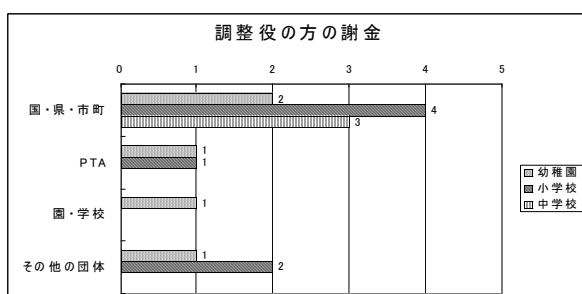


(3) 支援や提案(双方向)を調整しておられる方の謝金について



	ある	なし
幼稚園	21.7	78.3
小学校	25.9	74.1
中学校	23.1	76.9

(%)



※支援や提案(双方向)を調整しておられる方の謝金の支払元

第3. 地域とのコーディネートを進めるための必要条件

＜問6＞地域とのコーディネートをうまく進めるにはどのような条件整備が必要ですか。

○活動経費、コーディネーター、学校の実情の発信、人材バンクの設置が必要。

地域とのコーディネートを進めるための条件整備

項目	幼稚園	小学校	中学校	小計[(幼+小+中)/全件数]	
予算措置	48.9	40.0	23.5	39.4	
コーディネーター(加配教員)の必要性	10.6	17.0	5.9	14.2	
学校の実情についての発信	4.3	6.1	29.4	8.9	
人脈・人材バンク等	10.6	9.1	0	8.1	
地域の一体化	4.3	6.1	0	4.9	
日頃の人間関係	2.1	4.2	8.8	4.5	
喜びの場・居場所づくりの設定	8.5	3.6	0	4.1	
日程調整	4.3	3.0	5.9	3.7	
体制づくり	0	4.8	2.9	3.7	
打合せ時間の確保	2.1	3.0	0	2.4	
その他	4.3	3.0	23.5	6.1	[%]
	47件	165件	34件	246件	

第4. 支援を受けてのメリットと問題点

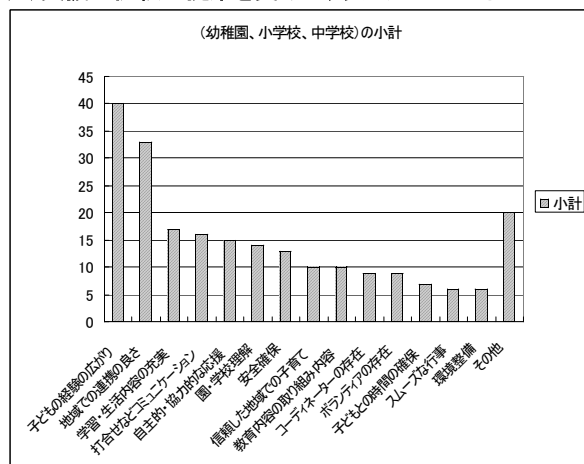
○「子どもの経験の広がり」「地域での連携の良さ」「学習・生活内容の充実」にメリット。
○活動経費の確保。打合せ時間不足等によるコミュニケーション不足。
「依頼内容の理解不足」が今後の課題。

6. 支援・提案を受けての成果

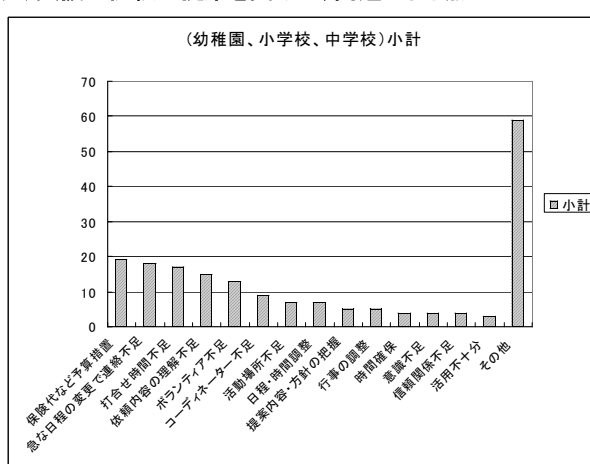
＜問7＞団体への支援の依頼や団体からの支援の提案を受けて、うまくいっていることと問題となる点は何ですか。

○活動経費、コーディネーター、学校の実情の発信、人材バンクの設置が必要。

(1) 支援の依頼や提案を受けて、うまくいっていること



(2) 支援の依頼や提案を受けて、問題となる点



Ⅲ-1. <(2)-1>第二次調査(アンケート)

「学校」のために自主的に組織した団体が「ない」理由に対しての調査用紙

「学校を中心」とした取組の第二次調査用紙
～自主的に組織した団体が「ない」回答から～

貴校の名称ならびに記載者職(管理職)・名を教えてください。(※) 種別に○をしてください。

* 私・国・市・町 立 * 園・小・中 記載者職・名

平成23年(2011年)2月8日発、滋教委生第60号で「学校を中心」とした取り組みの調査をお願いしました。その結果、「問1: 貴校に支援のために保護者・地域住民等が自主的に組織した団体がありますか。」で「ない」と回答され、その理由として「②積極的に地域に支援を求めている。」、「③現在、地域からの提案がないので、今後は積極的に支援を求めている。」と回答された学校に対して、「地域に根ざし開かれた学校づくり」*についてお尋ねします。

◇ご記入に際して、分かる範囲内でお願いします。また、不都合な点については、未記入でも結構です。

問1: 貴校では、地域の方々や既設の団体やグループから支援を受けるなど「地域に根ざし開かれた学校づくり」*に取り組んでおられますか。あてはまる()に○をお願いします。

【回答】 ①取り組んでいる ()

②取り組んでいない()

※問1で、「①」と回答のあった場合は、支援いただいている個人、団体やグループの内容を記入願います。(但し、各学校のPTAならびに学校支援地域本部等は除きます。)

【支援者・団体の内容】

→ おわり

※問1で、「②」と回答があった場合は、下のア～ウから選択をし、○を付けてください。ウは内容をお書きください。

- ア 支援をお願いしたいが課題があるため → 問2へ
イ 支援をお願いする必要を感じないから → 問3へ
ウ その他

【内容】

問2: 「課題になる」ことについて、次のア～カから選択し(複数回答可)○を付けてください。

- ア. 予算が足りない。
イ. コーディネートする人がいない。
ウ. 人材バンクがない。
エ. 情報が足りない。
オ. 団体に支援を求めるだけの時間が持てない。
カ. その他

問3: 「必要を感じない」ことについて、次のア～ウから選択し(複数回答可)○を付けてください。

- ア. 支援をうけなくても教職員だけで学校教育活動ができていから。
イ. 支援をお願いすると学校に今以上の負担が増えるから。
ウ. その他

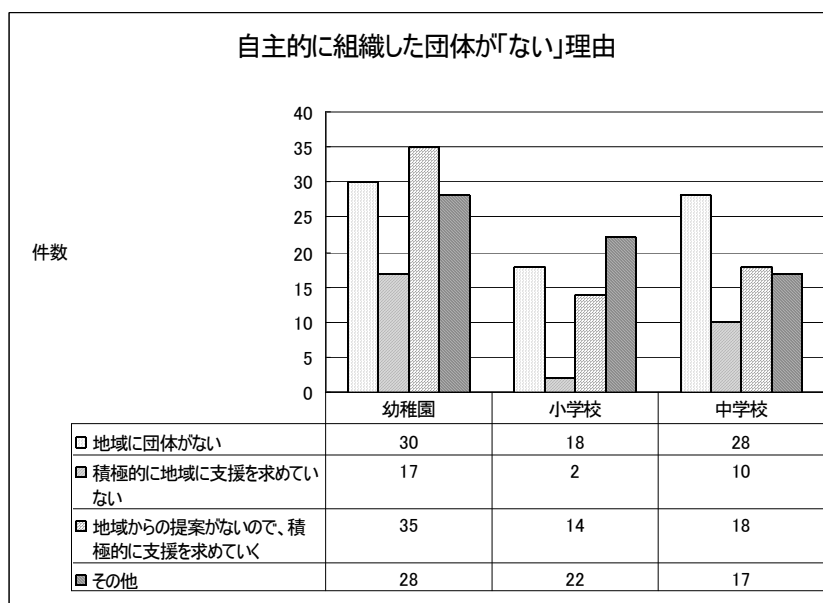
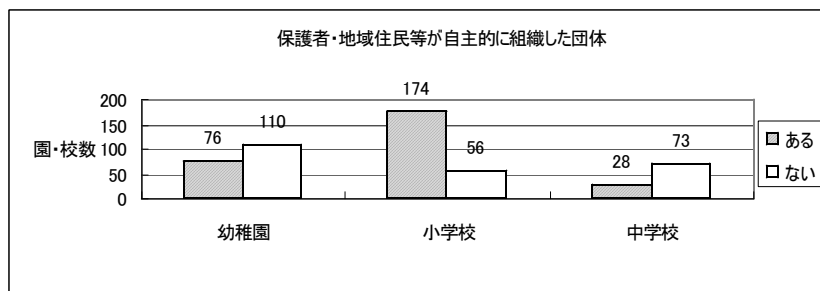
注) * : 「地域に根ざし開かれた学校づくり」

学校の教育方針や教育活動等を広く地域に伝え、地域の環境を積極的に学習に取り入れたり、地域の人材や企業等の協力を得たりすること。

Ⅲ-2. <(2)-1>第二次調査(アンケート)

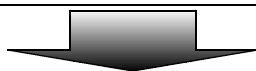
「学校」のために自主的に組織した団体が「ない」理由に対する調査結果

◇第一次アンケート調査結果からの質問（再掲）



<分かること>

「①地域に団体がない」「②積極的に地域に支援を求めている」
「③地域からの提案がないので、積極的に支援を求めている」「④その他」では、
学校の考え方に関わる「②」「③」について詳しく調査する必要があるのではないか。



<質問>「②積極的に地域に支援を求めている」や「③地域からの提案がないので、積極的に支援を求めている」では、本当に既設の団体からの支援が「ない」のか(但し、PTAや「学校支援地域本部」は除く)。

また、支援が「ない」場合は、「取り組んでいない」理由は何か。

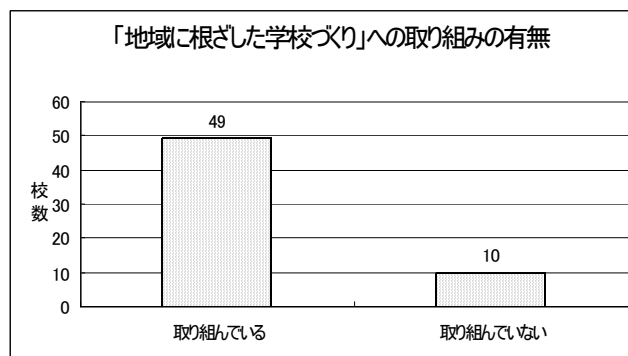
第1. 既設の団体による「地域に根ざし開かれた学校づくり」の取組の有無

＜問1＞学校では、地域の方々や既設の団体から支援を受けるなど「地域に根ざし開かれた学校づくり」に取り組んでおられますか。

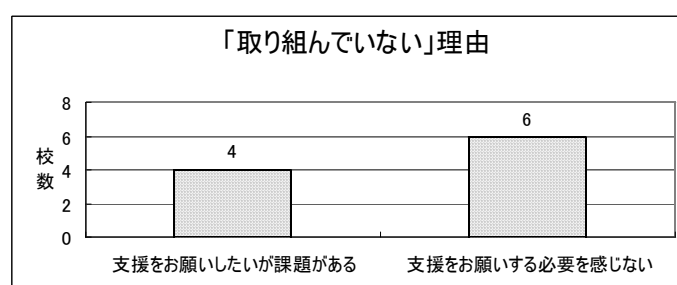
○個人を含む既設の団体による「地域に根ざした開かれた学校づくり」は、8割強で取組があるとした。支援が「ない」としたのは、中学校に多い。

※ 第一次調査結果より2／3を抽出

幼稚園＜33/34園＞97.1%、小学校＜9/9校＞100%、中学校＜17/19校＞89.5% ＜回収率95.2%＞



○取り組んでいる 83.1%、 取り組んでいない 16.9%



	ア(支援をお願いしたいが課題がある)	イ(支援をお願いする必要性を感じない)	ウ その他	小計
幼稚園	1	1	0	2
小学校	1	0	0	1
中学校	2	5	0	7
小 計	4	6	0	10

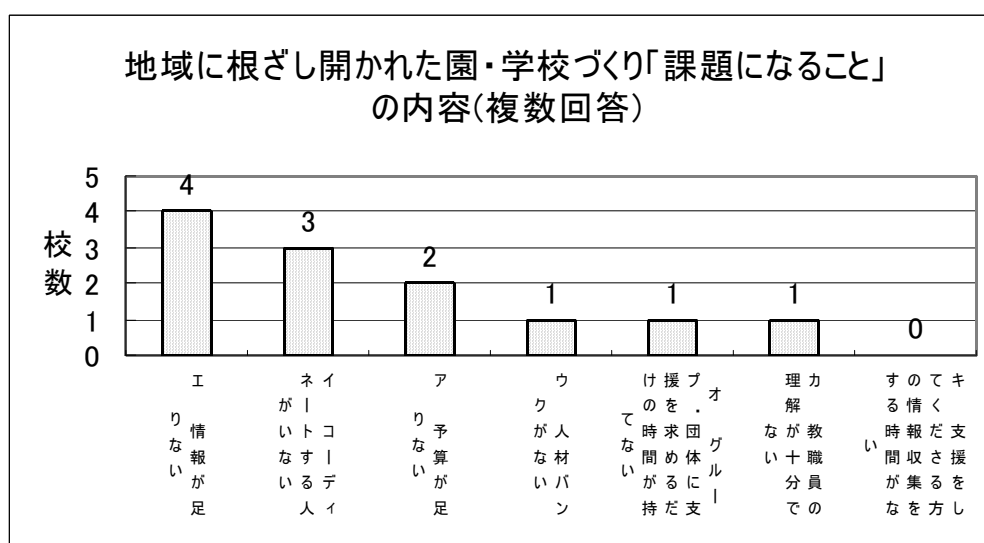
第2.「取り組んでいない」理由の内容

○支援をお願いしたいが課題があると回答した学校では、理由として「情報が足りない」「コーディネートをする人がいない」「予算が足りない」を挙げた。

『支援をお願いする必要を感じない』では、「支援を受けなくても教職員だけで教育活動ができている」「支援をお願いすると今以上の負担が増える」とした。

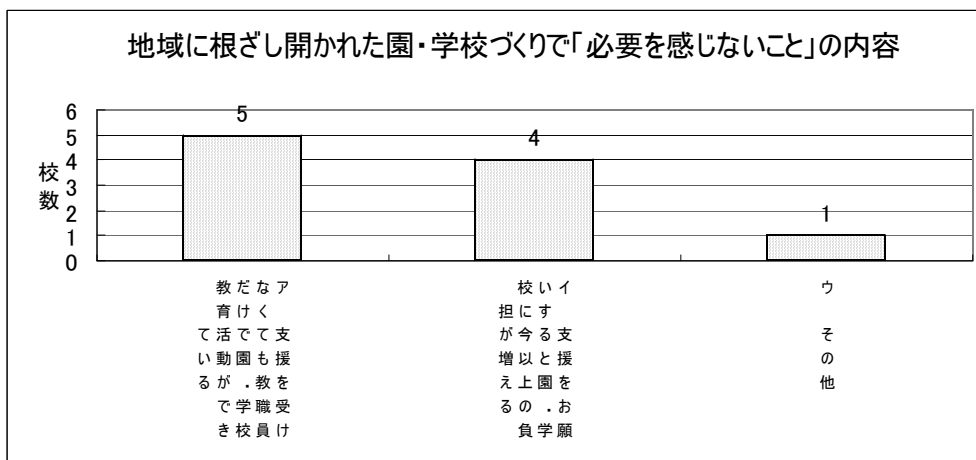
※ 「取り組んでいない」理由として、「支援で課題がある」が4校で、「支援をお願いする必要を感じない」が6校で回答があった。その内訳は、以下のとおり。

＜問2＞「課題になる」ことについて、次の選択肢から選んでください。



※＜幼－1園、小－1校、中－2校＞

＜問3＞「必要を感じない」ことについて、次の選択肢から選んでください。



※＜幼－1園、中－5校＞

IV-1. <(2)-2>第二次調査(アンケート)

「学校」のために自主的に組織した団体が「ある」回答に対しての調査用紙

NO. 1

「学校を中心」とした第二次調査用紙

～自主的に組織した団体が「ある」回答から～

貴校の名称ならびに記載者職(管理職)・名を教えてください。(※) 種別に○をしてください。

_____* 私・国・市・町 立 _____* 園・小・中 記載者職・名 _____

平成23年(2011年)2月8日付、滋教委生第60号で「学校を中心」とした取り組みの調査をお願いしました。その結果、「特色ある活動」に取り組まれたり、「コーディネートをされる方が貴校や支援団体の人以外」におられ、両者の間に入って支援や提案の調整をされる方がおられるなど、他の団体の参考になる御取組をいただいている学校にお尋ねします。

なお、貴校に複数の支援団体がある場合は、お手数ですが貴校の判断で特色のある活動をしておられると思われる団体1つについて御回答をいただきますよう御願います。

◇ご記入内容に関して、誠に恐縮ですが、ヒアリングをさせていただく場合がございますので、ご理解をお願い致します。

◇ご記入に際して、分かる範囲内でお願いします。また、不都合な点については、未記入でも結構です。

＜団体についてご記入ください＞・学校による聞き取りか、団体が直接記入ください。

(1)団体名、 構成メンバー数、活動年数 活動の中心地、構成メン バーに求められる資格 (分かる範囲内でご記入くださ い。「ない」場合は、「ない」とお書 きください。)	＜団体名＞ ＜構成メンバー数＞ _____ 人 ＜活動年数＞ _____ 年目 ＜活動の中心地＞ ＜構成メンバーに求められる資格等＞
(2)支援の概要	
(3)支援を実施するに至 った経緯(きっかけ) (どちらかに○をお願いします)	立ち上げようとしたのは個人からでしたか はい いいえ
(4)活動の活性化のため 受講もしくは、団体内で研 修を実施していますか。あ る場合は、その名称を記 入ください。	受講(研修)している ・ 受講(研修)していない (どちらかに○をお願いします) 【研修名】 _____
(5)活動経費の調達(何を 基に活動)	

(6)実施・推進体制の仕組み(組織図、構造図 等 個人の場合は役職名]		
(7)市町との関わり		
(8)学校以外の場所で(地域で)やっておられる活動内容		
(9)団体としての活動の状況(回数)	(地域の中での場合) 回／週・月・年 (どれかに○をお願いします)	(学校支援の場合) 回／週・月・年 (どれかに○をお願いします)
(10)団体の取組に関して何か参考にされたことやモデル例		
(11)団体の活動としてこれまでに工夫された点		
(12)団体として将来に向けての展望 (今後の取組)		
(13)学校を支援する場合の問題点や課題とその対応策	<問題点や課題> <対応策>	

NO. 3

<学校にご記入ください>

(14)コーディネートをする方が貴校や支援グループ・団体の人以外におられるかの有無と属性やおられる場所等 (分かる範囲内でお答えください)	コーディネートをする方はおられますか。 はい いいえ (どちらかに○をお願いします)															
(15)学校支援への取組の成果	(どちらかに○をお願いします) <table border="0"> <tr> <td style="text-align: center;">1</td> <td style="text-align: center;">2</td> <td style="text-align: center;">3</td> <td style="text-align: center;">4</td> <td style="border-left: 1px dashed black; padding-left: 10px; vertical-align: top;"> <コメント> </td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">大変役立った</td> <td style="text-align: center;">役立った</td> <td style="text-align: center;">あまり役立たなかった</td> <td style="text-align: center;">役立たなかった</td> <td></td> </tr> </table>	1	2	3	4	<コメント>						大変役立った	役立った	あまり役立たなかった	役立たなかった	
1	2	3	4	<コメント>												
大変役立った	役立った	あまり役立たなかった	役立たなかった													
(16)学校として当該団体の広報をしていますか。	している ・ していない (どちらかに○をお願いします) ↓ どこで啓発をしていますか？															
(17)支援を受けて変わったこと等																

<御記入ありがとうございました>

IV-2 学校のために自主的に組織した団体の活動状況

◇ 自主的に組織した団体が「ある」とした調査

<抽出数>

※ 第一次調査結果より2/3を抽出

幼稚園<5/13園>38.5%、小学校<36/42校>85.7%、中学校<12/16校>75.0% <回収率74.6%>

校 種	「特色ある活動内容」 に取り組まれている	支援、依頼の双方向で友好であり、「コーディネート」をされる方が学校や支援団体以外」 におられる (註:以下「コーディネートする人が他にいる」とする)
幼 稚 園	1園	4園
小 学 校	16校	20校
中 学 校	9校	3校

<調査項目>

・事業全体の内容の把握

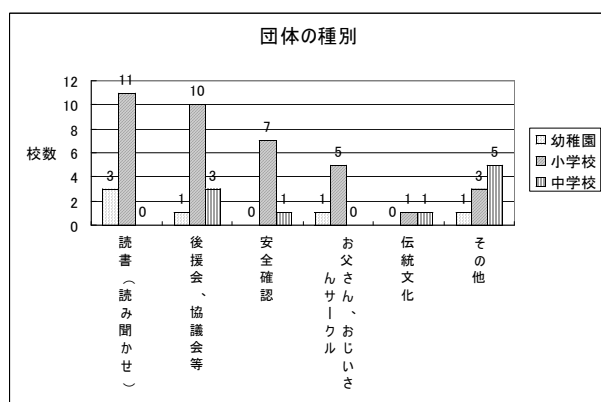
	項 目	内 容
①	事 業	・団体名
②	背 景・目 的	・支援の概要
③	過 程	・支援を実施するに至った経緯(きっかけ) ・立ち上げは個人なのか
④	根 拠	・市町(行政)との関わり ・地域の中での活動内容 ・団体の取組に関して何か参考にされたことやモデル例 ・団体としての活動回数 ・構成メンバーに求める条件
⑤	組 織	・実施・推進体制の仕組み(組織図、構造図)
	事 務 局	・所在地
	スタッフ	・構成メンバー数 ・研修の受講経験
⑥	予 算	・活動経費の調達(予算と内訳)
⑦	成 果	・取組の成果 ・学校が支援を受けて変わったこと等 ・団体の活動としてこれまでの工夫点
⑧	課 題	・学校を支援する場合の問題点・課題及びそれに対する対応
⑨	展 望	・将来に向けての展望(今後の取組)

第1. 団体から聴取した活動の概要

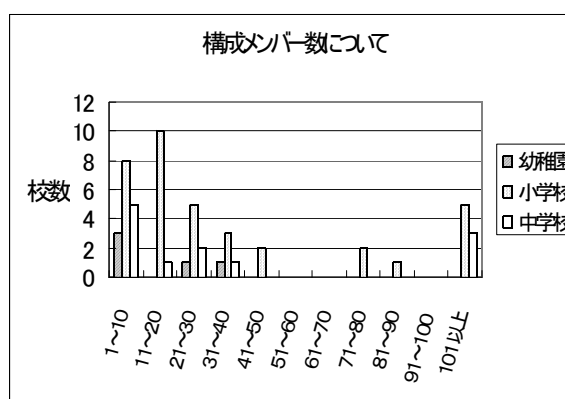
- 団体では、「読書（読み聞かせ）」「後援会・協議会」が多く、構成メンバー数も20人前後で、とりわけ小学校が多い。
- 活動年数は、6～10年前後の活動が多い。
- 活動の中心は一部公民館・集会所もあるが、殆どが学校である。
- 資格等は、一部体験者という規制を設けている団体はあるものの、殆どの市町で住民・学区民であれば可としている。

＜問1＞団体名・構成メンバー数、活動年数、活動の拠点地、構成メンバーに求められる資格は何ですか。

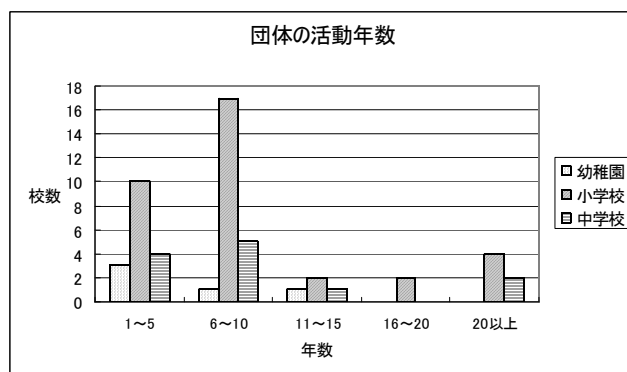
(1) 団体名



(2) 団体の構成メンバー数

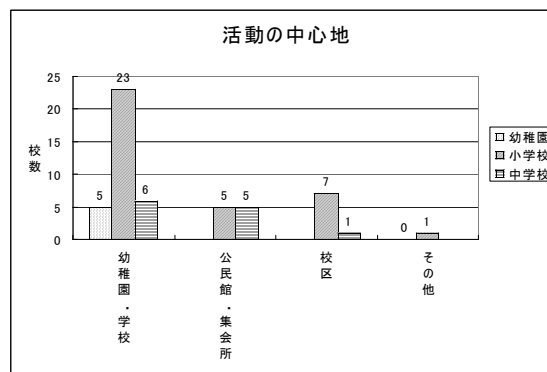


(3) 団体の活動年数



N=53校

(4) 活動の中心地



N=53校

(5) 構成メンバーに求められる資格等

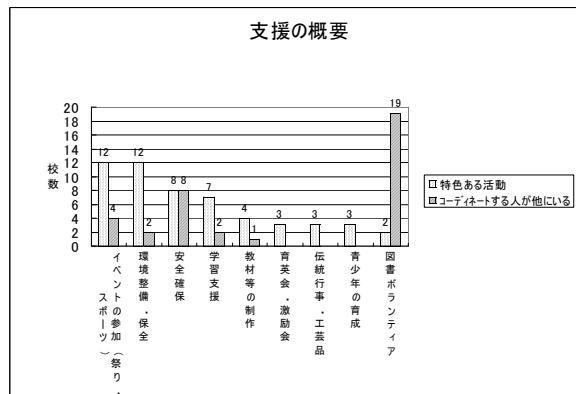
- ・歴代PTA会長（湖南市「あすなろ会」）
- ・60歳以上の老人（湖南市「いしべっこ」）
- ・スポーツ少年団指導者（東近江市「スポーツ少年団 剣愛会」）
- ・「初心者講習会」の修了の方（愛荘町「びんてまり保存会」）
- ・住民・学区民

第2. タイプ別に見た活動の内容等

- 「特色ある活動」を行う団体では、「イベントの参加」「環境整備・保全」を、「コーディネートする人が他にいる」団体では、「図書ボランティア」が多い。
- 支援団体の立ち上げは、「自主的・有志」か「要望・要請」で半数ずつ。立ち上げは、「個人からの立ち上げ」よりも複数人の立ち上げの方が多くなっている。
- 「コーディネートする人が他にいる」団体では、研修の必要性を求めている。活動経費の調達では、「補助・助成金」と「PTA会費」で対応が4割あり、無償が3割ある。

(1) 支援する団体の概要

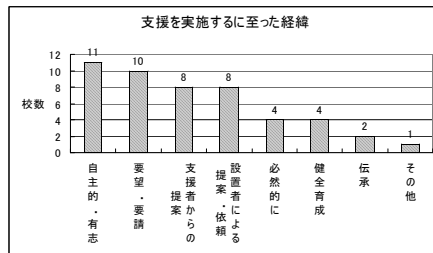
＜問2＞支援の概要は何ですか。



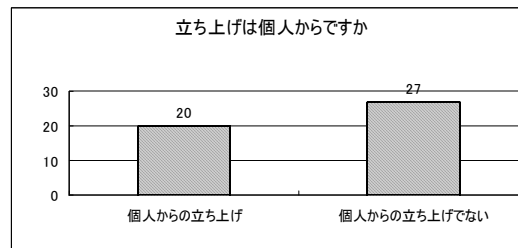
N(特色ある活動) = 24校(54件)、N(支援する者が外に居る) = 25校(36件)

(2) 支援を実施するに至った経緯

＜問3＞支援を実施するに至った経緯（きっかけ）は何ですか。

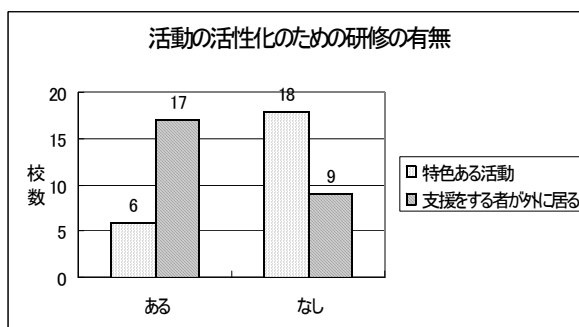


N=53(校)＜複数回答あり＞



(3) 活動を活性化するための研修

＜問4＞活動の活性化のため受講もしくは、団体内で研修を実施していますか。

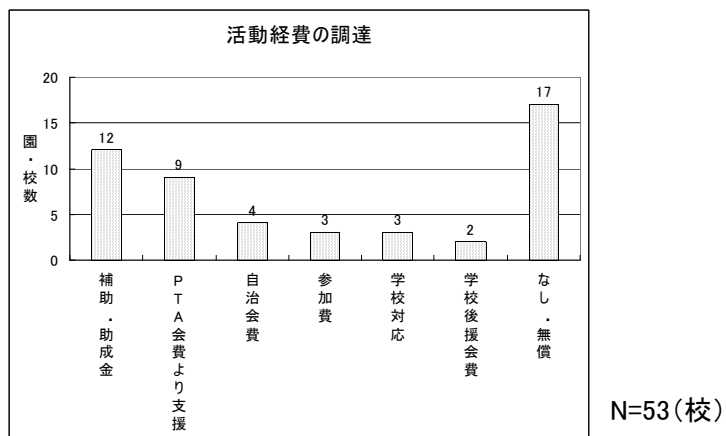


＜実施している講座名＞

- ・養成講座
- ・指導者研修会
- ・入門講座
- ・スクールガード研修
- ・図書館ボランティア研修
- ・青少年育成大会 等

(4) 支援する団体の活動経費の調達

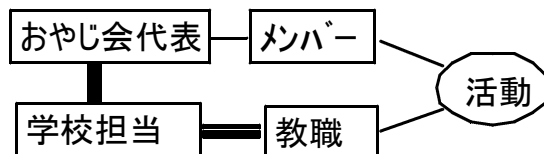
＜問5＞活動経費の調達（何を基に活動）しておられますか。



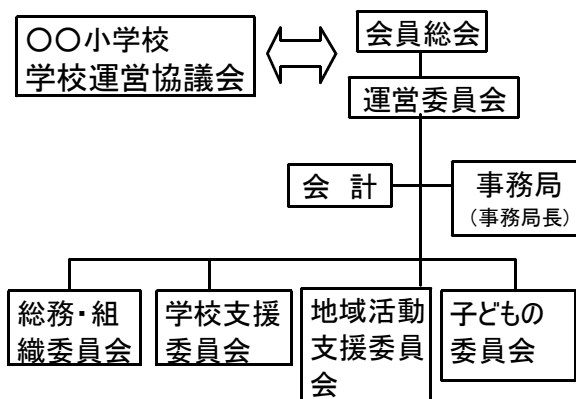
(5) 実施・推進体制の仕組み

＜問6＞実施・推進体制の仕組み（組織図、構造図 等 個人の場合は役職名）

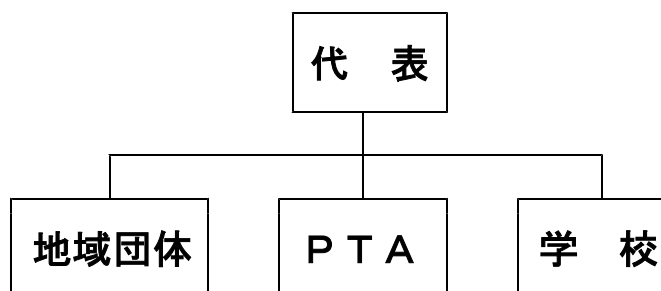
＜例1＞



＜例2＞



＜例3＞



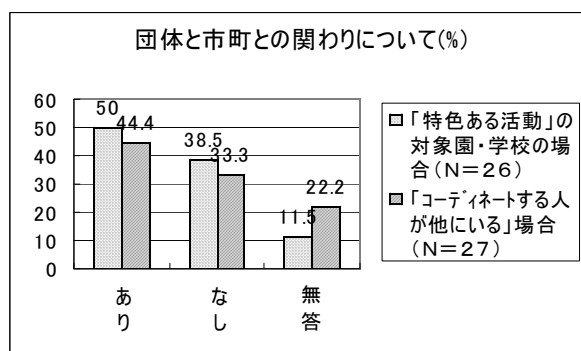
第3. タイプ別に見た学校以外での活動内容等

- 「特色ある活動」を行う団体は、市町との関わりが半数である。
- 「コーディネートする人が他にいる」の団体では、若干市町と関わる率が低下する。
- 市町との連携については、「特色ある活動」を行う団体で「コーディネートする人が他にいる」の団体より多くなっている。
- 団体は、地域支援よりも学校支援の頻度が多い。
- 「特色ある活動」を行う団体では、他の団体を参考に行っている率が高い。

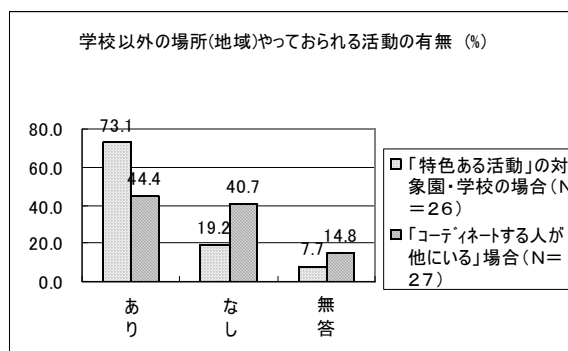
＜問7＞市町との関わりはどうか。

＜問8＞学校以外の場所で（地域で）やっておられる活動内容は何か。

(1) 市町との関わり



(2)-① 学校以外の場所で(地域で)やっておられる活動の有無



(2)-② 学校以外の場所で(地域で)やっておられる活動の内容(日本大学 佐藤晴雄 先生の「学校支援ボランティア」分類から)

◇施設メンテナー型

・遊具づくり ・林道の整備 ・畑づくり ・除雪 ・花壇づくり

◇環境サポーター型

・町内清掃 ・通学路安全パトロール(登下校) ・下草刈り ・学区内巡視 ・資源回収

◇ゲストティチャー型

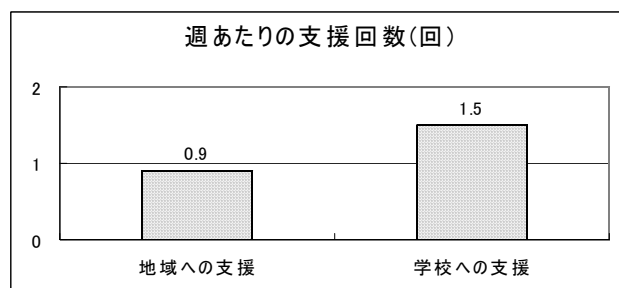
・「ほたるの観察会」 ・江州音頭 ・滋賀ビオトープ研究会 ・消防団 ・夏祭り
・市民運動会 ・早起きラジオ体操 ・自然観察会 ・〇〇街歩きウォッチング

◇学習アシスタント型

・米づくり ・小5・6合宿 ・通学合宿 ・伝統文化体験教室
・子ども会活動 ・スポーツ少年団 ・各種講演会 ・読み聞かせ ・進路学習

(3) 支援する団体としての活動の状況(回数)

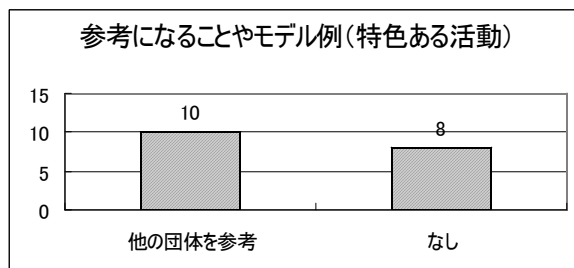
＜問9＞団体としての活動の状況(回数)はどうか。



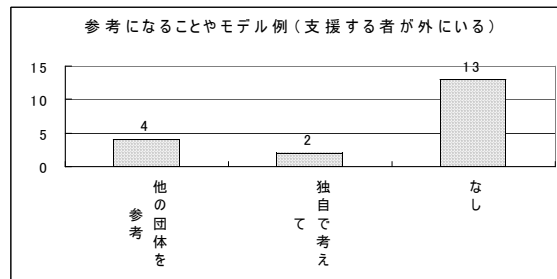
(4) 団体の取組に関して何か参考にされたことやモデル例

＜問 10＞団体の取組に関して何か参考にされたことやモデル例はありますか。

◇「特色ある活動」の対象学校



◇「コーディネートする人が他にいる」の対象学校



第4. タイプ別の活動の工夫点

○学校・学年・学級・PTAによる広報、ホームページ等のさまざまな手法により交流や活動の工夫を実現。

＜問 11＞団体の活動としてこれまで工夫された点は何ですか。

◇「特色ある活動」の対象学校

- ・参加者募集のためのチラシ・リーフレット作成
- ・小学校区で全員参加
- ・各区長と学校とで連絡を密にする
- ・三世代交流ソフトボール
- ・活動内容を見せ広く(展覧会・展示会)知ってもらう
- ・ファストパス(並ばずして優先的にもらえるチケット等)

◇「コーディネートする人が他にいる」の対象学校

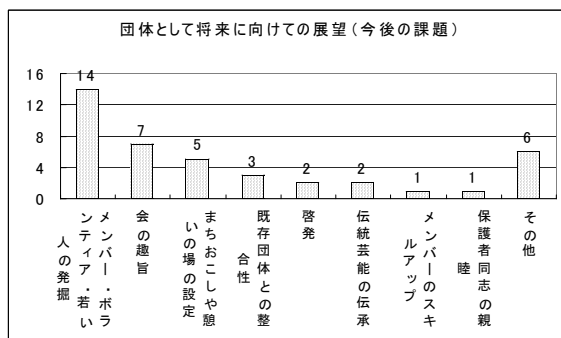
- ・横断幕の設置
- ・グループの代表者と学校との連携
- ・レパトリーの拡充
- ・ゲーム的要素の導入
- ・会報の発行
- ・団体との連絡会や交流会

第5. タイプ別の将来に向けての展望

- 人材発掘、団体の趣旨を広く周知する。
- 平日に参加しうる体制の工夫、活動経費の調達、タイプ別行事間の調整が必要

1. 今後の取組

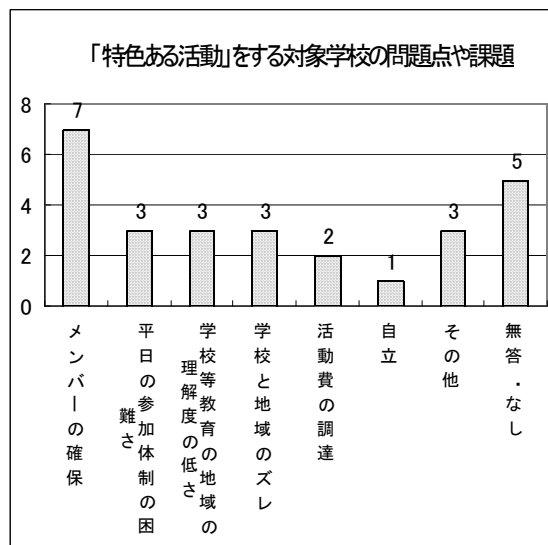
＜問12＞団体として将来に向けての展望（今後の取組）は何ですか。



2. 問題点と課題

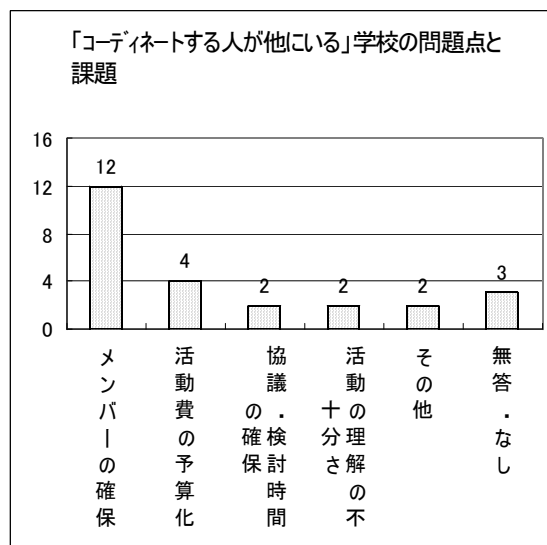
＜問13＞学校を支援する場合の問題点や課題とその対応策＜問題点や課題＞

◇「特色ある活動」の対象学校



N=26

◇「コーディネートする人が他にいる」の対象学校



N=27

第6. タイプ別の学校支援の取組成果

- 「地域・学校・子ども」にとって学校支援の取組は有効。
- 「特色ある活動」「コーディネートする人が他にいる」の双方とも地域とのつながりの充実という観点から大きく成果。
- とりわけ、「特色ある活動」では『伝統の継承』に、「コーディネートする人が他にいる」では、「学校の諸活動」に成果がある。

1. 双方向のコーディネーターの有無

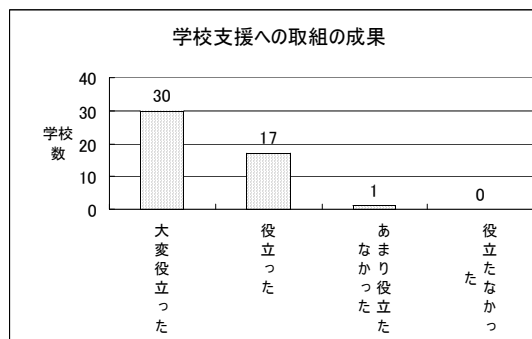
＜問14＞コーディネートされる方が貴校や支援団体の人以外におられるかの有無・属性・場所等。

	「おられる」の校数、属性、おられる場所	
特色ある活動 〈N=26校〉	校数	6校
	属性	・ビオトープ副会長 ・町の社会教育施設の職員 ・「学校支援地域本部」の地域コーディネーター ・児童・生徒支援加配
	場所	・町の社会教育施設に勤務 ・学校
コーディネートする 人が他にいる 〈N=27校〉	校数	15校
	属性	・福祉協議会事務局職員 ・PTA地区委員長 ・元サポーター ・市費事務員 ・子ども安全リーダーの代表 ・PTA役員 ・子育て応援団事務局 ・住人 ・青少年育成協議会会長 ・派遣の図書館司書 ・読書サポーター講習会受講者
	場所	・地域の方 ・学校 ・社会福祉協議会

2. 取組の成果

(1) 学校支援への取組の成果（4段階等分割法）

＜問15＞学校支援への取組の成果はどうか。



(2) 学校支援への取組の成果のコメント

◇「特色ある活動」の対象学校の回答内容

項目	内 容
つながり	・教職員と交流することで子どもの意見を交わす機会になっている。 ・親子の触れ合いだけでなく、友達のお父さんや地域のお年寄りとの交流にもつながっている。 ・学校としては、児童と地域の方々とのつながりが深まる。 ・地域の方々同士の関連を築く上で、大変役立っている。 ・生き物の観察を親子で実施し、関心を深めることができた。 ・ボランティアの指導者、保護者、子どもの交流が広がっている。 ・流しそうめんでは、親子の喜ぶ顔が見られた。
9件	・学校と家庭、地域との連携をつなぐ大きな基盤となってきた。 ・「江州音頭」の踊りの指導を受けるだけでなく、地域の方とのふれあい交流として役立っている。

伝 統 4件	・長年の歴史と伝統を継続する。 ・長年続いている取組なので、地域住民の周知の上、活動ができています。 ・びん細工手まり発祥地の学校として地元の伝統工芸品を見直し、保存発展する意識を高めていく。 ・生徒への茶道教室の開催についても協力をいただき感謝している。
子 の 姿 3件	・子どもたちに貴重な体験の場を与えていただいている。 ・生徒たちに、「良き大人の姿」「善良な大人の姿」「重ね合わせる将来の自分の大人像」を示していただいている。 ・生徒たちが地域の方の願いや思いを直接感じる機会となっている。
協地 力域 力の 3件	・会員がそれぞれ得意とされる分野で活動を引っ張ってくださり、いつも充実したものとなっている。 ・学校の取組をよく理解していただき、地域とパイプ役になってもらっている。 ・メンバーの中に大工さんや重機を扱える人など、専門職の方がおられ役立っている。
安 全 3件	・フットマークの取組では、安全に対する意識づけができた。 ・運動会の準備や参観時の学校周辺見回りなど、たいへん助かっている。 ・地域住民の方々が独自に夜間パトロールなどをされ、青少年の健全育成に大変役立っている。
環 境 3件	・環境保護の意識が高まった。 ・環境面でも支援をいただいている。 ・地域の環境教育を推進する上で地域ボランティアの協力はありがたい。生徒も身近な問題として受け止め、意欲的に学習できる。
軽負 減担 3件	・交流がきっかけに松の剪定などもしていただき、学校負担が軽減できている。 ・図書の整理や校舎外の広大な草刈りは、職員の負担軽減になっている。 ・中庭の除草、木々の剪定については非常に助かっている。
行 事 2件	・学校からの依頼で餅つき大会を学校行事の中に組み入れた。 ・特に学校行事のサポートでは、大いに助かっている。
指生 導徒 2件	・授業に入れない子や問題行動を繰り返す子をサポートしていただくことで大変助かっている。 ・生徒の問題行動に対して指導の援助をお願いしている。
補学 充力 1件	・放課後の補習に定期的に来ていただける方を確保する必要がある。
P T A 1件	・本会は学校とは基本的に独立していますが、PTAとの連携がある。
補 助 2件	・秋の芸術鑑賞や児童会活動やクラブ・委員会活動等に対しても補助していただいていたから。 ・奨学会から卒業生にお祝いの品をいただき、子ども達に地域の一員としての自覚が生まれた。
国 際 理 解 1件	・ランドセルの海外寄贈も国際理解につながった。

◇「コーディネートする人が他にいる」の対象学校の回答内容

項目	内 容
読書活動 9件	・保護者がお話をしてくださることで、より親しみを持って聞くことができる。 ・静かに絵本に集中できる子が増えている。 ・いろいろな絵本の楽しさを味わうことができる。 ・児童の読書への関心を高めることに一役買ってくださっている。 ・7年の活動のおかげで、今日の本校の図書活動がある。 ・学年に応じた本を選定してくださって、子どもたちも楽しんできている。 ・子どもたちは「今度はどんな絵本かな」と、とても楽しみにしている。 ・読んでもらった絵本から、読書に興味を持つ子もあり、読書に対する関心も高まっている。 ・朝読書の読み聞かせだけでなく、図書室の本の整理など、生徒の読書活動に関することを広く支援していただいて、たいへんありがたい。
地域の支援 6件	・保護者同士の繋がりだけではなく、地域の住民としての関わり、関係づくりに役立っている。 ・本校が進めている「地域の方と顔見知りになる」という部分でうまく進めていただいているので、子どもたちをはじめ職員も地域とのつながりが密になり、大変役立っている。 ・職員・保護者だけではできないことがある。 ・地域ぐるみでという考え方が一般化したことは大きな成果である。 ・コーディネーターを地域側にも置くことで、今後の充実が期待できる。 ・応援団の方々の支援により村(地域の)教育力・学力を生かすことができた。
安全指導 5件	・子どもの「安全・安心」という意味では、保護者や学校だけでの問題でない。 ・各町老人クラブの協力があり、スクールガード登録もし、全員が安全確保活動に参加されている。 ・ここ数年、不審者事案や交通事故は発生していない。 ・特に、生徒の登下校における交通安全および不審者対応の管理面でたいへん役立っている。 ・緊急時(熊対策等)の見守りをしていただき助かった。
活学 支援 3件	・学校生活支援 ・子どもの豊かなくらし支援等(イベント)大変助けられている。 ・顧問が剣道経験がないため、大変有意義な取り組みである。
支学 援習 2件	・国語力向上をめざす本校にとって、基礎学力の育成、学習態度の定着をする機会となり、毎年継続して活動してくださることに、大きな成果がある。 ・学習支援
のP 影T 響A へ 2件	・PTAが1日／週を組織的に下校の立ち番に立ってくださるようになった。 ・PTA活動を活性化させていただいている。
活保 性護 化者 の 1件	・保護者同士の親睦が図れる。

3. 支援を受けて変容が見られる点 等

＜問17＞支援を受けて変わったことは何ですか。

◇「特色ある活動」の対象学校の回答内容

項目	内 容
学 校 7件	・少人数でのグループ活動が可能になり、生徒の理解も深まった。 ・学校支援や学生ボランティアの協力により教育活動の内容が多様で深まりをもつようになった。 ・理科や生活科の学習に利用できるようになってきた。 ・特色ある教育活動として取り組むため、学校の活性化につながっている。 ・学校として講師等の依頼を当該組織のOBということで活用することがある。 ・学校の取り組みに対して、いろんなご意見もいただくので、真摯に受け止め改善している。 ・保護者、地域に対しては学校の教育内容や様子を直に伝えられる機会となり、学校への理解を深められた。
地 域 の 支 援 7件	・地域とのつながりやボランティア精神の涵養など生きたモデルとなっている。 ・連携することで、学校も活性化され、地域の方とも交流できるようになった。 ・地域実態がよく分かり、子どもへの指導に役立っている。 ・地域の要望も直接聞けるのでありがたい。 ・地域の子どもは地域でみていこうという意識が浸透したこと。 ・地域みんなで学校を支援し、子どもを育てていく体制になってきている。 ・「支える会」の方が授業参観に来られると多少生徒も意識して授業に取り組めるようである。
維 環 持 境 管 理 施 設 4件	・児童や地域の方々が、わくわく公園に集い、生き物に触れる機会が多くなってきた。 ・わくわく公園の整備が定期的になされ、環境の維持管理ができるようになった。 ・学校施設や環境整備等でも支援していただき充実してきた。 ・中庭の環境維持が充実したことや、学校の特色ある取り組みとして茶道教室が定着してきたこと。
つ な が り 3件	・子どもたちが屋外での活動に参加し、人とのコミュニケーションが高められた。 ・学校の教育活動に地域の方が協力いただくことで、ふれあいを通して、児童のコミュニケーション能力を向上させることにもつながっている。 ・学校と地域の方々とのコミュニケーションが図れるようになったり、学校が活性化してきた。
子 の 姿 3件	・生徒たちが地域の方の願いや思いを直接感じる機会となった。 ・生徒たちに「良き大人の姿」「善良な大人の姿」「重ね合わせる将来の自分の大人像」を示していた。これらのことにより、感謝の気持ちが表現できたこと。 ・自分も大人になったら、あの大人のようにになりたいという気持ちの芽生えを感じている。
参 父 画 親 の 3件	・父としての子育ての考え方の交流ができる。 ・男性保護者も学校行事に参加することが大切、というムードを作ってくださっている。 ・教職員も男性保護者との関わりが増えてくることで、子どもを取り巻く環境をより広い視野で捉えることができるようになってきていると感じる。
生 活 面 3件	・子どもたちが、地域の方と交流することで、登下校時の挨拶や声かけに広がりが見られた。 ・大人と子どもが交流し、学び合う機会が増え、子ども達も大人から学ぶことが多く、あいさつもすっかりとできるようになってきた。 ・ボランティアに対する生徒の姿勢(かかわり)、挨拶等
援 予 助 算 1件	・学校の教育活動、PTA活動を物心両面にわたって支えていただくことで、教育予算の不足を補っていただき、備品や消耗品等が充実してきた。
伝 統 1件	・地元の伝統的工芸品の良さを重要性としてその価値について新たに認識することができた。

◇「コーディネートする人が他にいる」の対象学校の回答内容

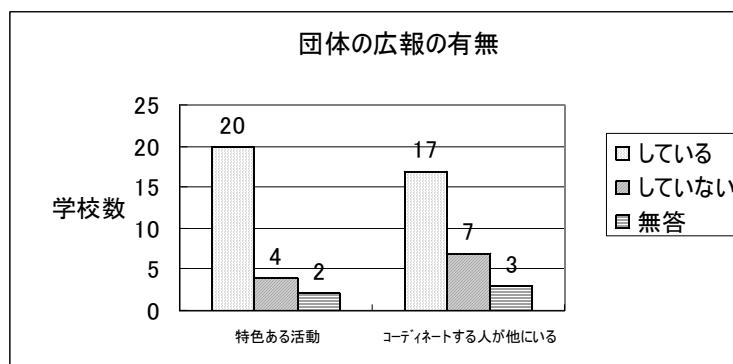
項目	内 容
読書活動 8件	・いろいろな絵本や紙芝居に親しむことができた。 ・集中して話を聞く機会を持つことができた。 ・図書館経営に参加していただくことで、学校業務が円滑に進んでいる。 ・年度初め各自が読書量目標数値を設け、達成に向け読書に励んでいる。これまで毎年、目標達成しているが、その一因として読み聞かせによる図書への親しみ、サポーターからの本の紹介による図書への興味付けがある。 ・図書館の利用が増え、読書活動が活発になった。 ・子どもたちの読書への関心が高まった。 ・全校活動として朝読書が浸透してきた。 ・朝読書で生徒が手に取る本の分野が広がった。
つながり 6件	・保護者同士の輪が広がり、園教育に対しても協力的になった。 ・保護者同志のコミュニケーションが密になったりしている。 ・地域の人に見守られているという意識が子ども達や学校職員の中で育ってきている。 ・学校の中にたくさんのボランティアの方が入ってもらうことにより、子どもと地域の方が多くの方と顔見知りになることができた。 ・気軽にボランティアの方の派遣を頼むことができるようになった。 ・子どもはもとより、教員とも親しくなり、子どもとともに育てる学校応援団の1つの組織として、互いに深い信頼関係にある。
地域 6件	・地域の方との交流が深まってきている。 ・地域全体で子どもたちの豊かな心を育てようという意識の向上につながっている。 ・地域協働合校への意識(協力して育つ・共に育つ・響いて育つ) ・この活動が「子どもと楽しもう会」の方に生き甲斐の一つになっている。 ・子どものくらしはかかわる大人により豊かになると、子どもが自覚するようになってきた。 ・地域が大きな成果を上げてくださっている。
学校 5件	・学校全体の児童と関わっていただくことで触れ合いが広がっていく。 ・学校の中に地域の方々が入り、関わってくださることで、学校が活性化された。 ・地域に支えられているという実感が職員に浸透した。 ・子どもたちに、違った目線からの指導がしてもらえたり、依頼がしやすい。 ・教師だけでなく、複数の大人による学習は学びの質を向上させた。
安全指導 5件	・教員の見守りだけでは十分ではないので、地区や地域で見守っていただくことで、教員の見守りをする所を重点的に決めて行えることができるようになった。 ・PTAの安全に対する取り組みも活発になった。 ・もはやこの激動の時代、学校だけでは子どもは守れない、地域ぐるみで子どもの「安全・安心」を確保するという気持ちが浸透しつつある。 ・教員の見守りだけでは十分ではないので、地区や地域で見守っていただくことで、教員の見守りをする所を重点的に決めて行えることができるようになった。 ・生徒の登下校における、交通マナーがよくなり、地域の方々も喜んでおられる。
生活面 2件	・子ども達が、じっくりと人の話を聞けるようになった。また、授業にも集中できるようになってきた。 ・子どもがきちんと剣道と向き合うことができた。

意見 交流 2件	・地域側コーディネーターと学校(主に校長)が、月1～2回のペースで学校支援を話題に話し合う。 ・学校の中に地域の方々が入り、関わってくださることで、学校が活性化され、コミュニケーションが図れるようになった。
そ の 他 1件	・未就園の子どもが園に憧れる。

4. タイプ別の広報の方法

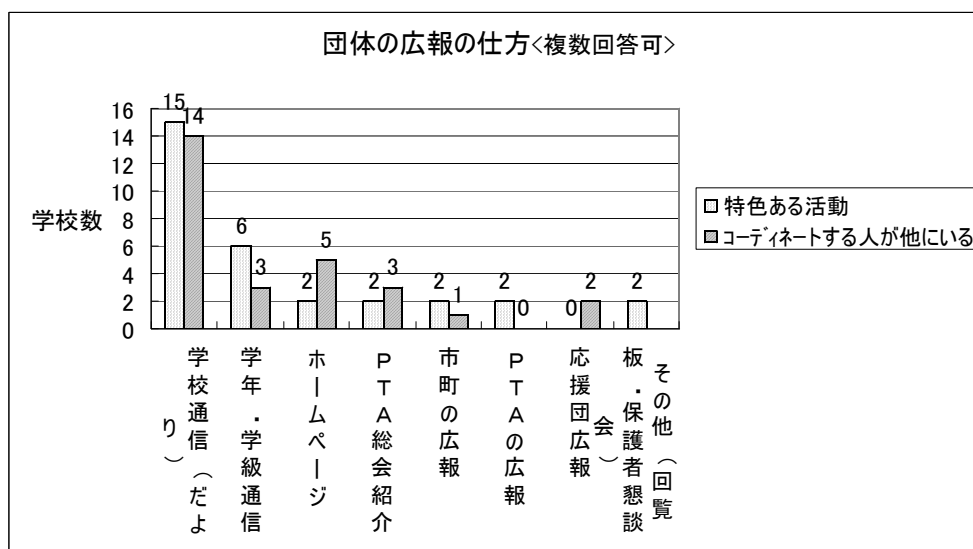
＜問16＞学校として当該団体の広報をしていますか。

(1)団体の広報の有無



N=53

(2)広報の仕方



V. タイプ別の実践例(第三次調査(ヒアリング))

1. タイプ別調査対象内容

(1) 特色ある活動内容

第一次アンケート調査で自主的に組織した団体が「ある」とした場合の「特色ある活動内容」について興味ある回答をされた団体について抽出する。

(2) コーディネートする人が他にいる

第一次アンケート調査で自主的に組織した団体が「ある」とした場合の「支援・依頼の双方向でコーディネートする人が他にいる場合」について回答をされた団体について選出する。

2. タイプ別調査対象校の概要

(1) 訪問校等

「特色ある活動」

訪 問 校	大津市立堅田小学校
訪問日時	平成23年7月16日<土>9:50～11:30
所 在 地	大津市本堅田三丁目6-1
創 立	明治5年 今堅田に致道学校設立(創立136年)
学 級 数	1年:4学級 2年:5学級 3年:5学級 4年:4学級 5年:4学級 6年:5学級 特別支援学級2学級 <計>29学級
児 童 数	895名
教 員 数	H22 45名
学校長名	伊 藤 美 佐 子
学校支援	「おや連！」子どもの笑顔をプロデュース < http://www.geocities.jp/o8ren/ >

「コーディネートする人が他にいる」

訪 問 校	湖南省立石部小学校
訪問日時	平成23年7月11日<月>13:00～15:00
所 在 地	湖南省立石部中央二丁目3-1
創 立	明治4年 小島本陣内に石部学校設立(創立137年)
学 級 数	各学年2学級、特別支援学級2学級 <計>14学級
児 童 数	365名
教 員 数	H22 21名
学校長名	谷 口 茂 雄
学校支援	「学校応援団」< http://www.edu-konan.jp/ishibe-el/ > ・見守りボランティア ・クラブボランティア ・郷土資料整備ボランティア ・石小ホームページボランティア ・環境整備ボランティア ・図書ボランティア ・ふれあいボランティア

(2) タイプ別の見学・ヒアリング内容のポイント等

「特色ある活動」

	大津市立堅田小学校(堅小 おや連!)6年目
たちあげのきっかけ	・仕事等の都合でPTA活動への参加は難しいが、「小学生とその子どもたちに貢献したい!」という思いを具現化するため、「おとうさんクラブ準備検討会」を経て「おや連!」を発足した。
特色ある活動	・PTA事業の一環ではあるが、PTAの役員や委員になるのではなく、「 <u>できる人が できる時に できることを</u> 」モットーに、学校や子どもに貢献する。
双方向の支援	校→団体……(×) 団体→校……(○)
コーディネーターの有無	コーディネーター………(×)
今後の取組	・メンバー増加につながる仕向けと活動を継続する中で、活動能力や事業展開能力の強化を図り、学校以外での <u>地域活動やまちづくり活動</u> に参画するなど、地域に貢献し得る組織へと発展させていく。 ・学校やPTAではやりたいが動きにくいという事業では、スマートに対応できる可能性がある。
特 徴	①学校支援が地域活動やまちづくりへ ②PTA等の別団体との連携

「コーディネートする人が他にいる」

	湖南市立石部小学校(学校応援団)4年目
たちあげのきっかけ	・校長先生の思い(図書ボランティア「この ゆびと一まれ」)10年目である。 ・子ども達の素晴らしい瞳に魅了され、ふれあい部を作成した。(子ども達とのふれあいボランティア「いしべっこ」)16年目である。
特色ある活動	・学校行事に合わせてのスペシャルと題して読み聞かせをしている。子どもたちの農業体験や昔遊び等、学年に応じた活動をしてもらっている。 ・学校応援団には、12の団体がある。
双方向の支援	校→団体…(○)団体→校…(○)
コーディネーターの有無	コーディネーター………(○) ＜地域コーディネーター(地域住民)＞
今後の取組	組織の活性化と若い参加者を求めている。
特 徴	①コーディネーターの運用・活用 ②既存の団体と新規の団体との運用

※太枠が特記すべき内容。

3. タイプ別のヒアリング結果

(1)「特色ある活動内容」の場合

<大津市立堅田小学校>

①「堅小 おや連！」の活動成果

- ①親子の喜ぶ顔が見られた。
- ②安全についての意識付けができた。
- ③「ラントセルギフト」は、子どもの使用済みのラントセルを集めアフガニスタンに送付する事業であり、国際理解につながった。
- ④諸活動が地域の活性化につながっている。
- ⑤「おや連」の会員は事業をとおして楽しんでおられる。
- ⑥別の組織のネットワークの利用・活用。
- ⑦地域とのつながりやボランティア精神の涵養など生きたモデルとなっている。

②「堅小 おや連！」の課題について

- ①メンバーの増加。参加者の声(ニーズや要望)のアンケート。
- ②地域に貢献し得る組織に発展させていく。
- ③活動に際して、事務面、経済面においても自立が必要である。
- ④学校やPTAではやりたいがやり難い事業を引き受ける。

③地域連携を成功させるために

- ①「できる人が できる時に できることを」
- ②市民誰もが会員として参加できる。
- ③学校を良くするために、自らが楽しむこと。
- ④PTA役員会と団体役員会とは、同一時間帯に会議開催。
- ⑤まちづくりに参画。
- ⑥牽引者の存在。
- ⑦機材も会員個々のネットワークを活用。(日頃の人間関係)

(2)「コーディネートする人が他にいる」場合

<湖南市立石部小学校>

①学校応援団の活動成果

- ①常会・本部役員会・全員集会が定着する。
- ②ボランティアの種類と協力の幅が広がる。
- ③学校行事が充実し、安全に行える。
- ④子どもと地域の人と顔見知り。
- ⑤広報活動で学校応援団の活動が認知される。
- ⑥ボランティアの派遣が気軽に可能。

②学校応援団の課題について

- ①「学校は敷居が高い」感情が残る。
- ②学校・家庭・地域のアイデア交流。
- ③事務局の部屋の鍵を事務局員に預ける。
- ④まちづくり協議会とPTA等を巻き込む。
- ⑤学校応援団の認知度を高める。
- ⑥「つなぐ活動」の更なる充実。
- ⑦教職員の異動等で影響のない取組。
- ⑧「学校」―「まちづくり協議会」―「応援団」と 連携が必要。
- ⑨人材登録バンクづくり。

③地域連携を成功させるために

- ①管理職のビジョン。
- ②コーディネーターの存在と待機・休憩できる部屋。
- ③子ども・来校者の把握可能に。
- ④学校は、地域、子ども、保護者とを「つなぐ」。
- ⑤教職員の組織づくり。
- ⑥活動記録を残す。
- ⑦地域全戸に啓発。
- ③幟旗、帽子のグッズで啓発。
- ⑨地域の各種団体を巻き込んでの立ち上げを。

【資料】 ＜実践例＞ ～第三次調査（学校訪問：ヒアリング）～

自主的に組織した団体が「ある」とした場合で、「特色ある活動内容」をしている団体と「支援・依頼の双方向でコーディネートする人が他にいる」団体とをヒアリングした結果を示す。

◇「特色ある活動内容」の場合

＜大津市立堅田小学校「堅小 おや連！」＞

1. 「堅小 おや連！」の概要

(1)「堅小 おや連！」の願い

- ①お父さん方は力を持っておられるにもかかわらず不参加者が多い。担ぎ出す方法はないか。
- ②女性ばかりのPTA組織ではなく、おやじの活躍する場である「おとうさんクラブ」のようなものを立ち上げたい。
- ③お父さんの頑張っている姿を見せる。
- ④仕事等の関係でPTA活動への参加は難しいが、何か「小学生とその子どもたちに貢献したい」という思いを具現化するため発足した。



※「できる人が できる時に できることを」モットーに活動する。

・参加者の自発的な発案で堅田小とその子どもたちに貢献する活動を行う。

(2)「堅小 おや連！」の内容

①設立の経緯

○平成18年に「おや連！」の準備委員会設立(6年目)

PTAの会長・副会長が発起人(キーマン)＜男性の役員からでてきた＞

→ 女性ばかりのPTA組織ばかりでなく、おやじの活躍する場である「おとうさんクラブ」を立ち上げたい。

○アンケートの実施(ニーズの調査):全校児童の保護者対象

問)お父さん方で、「おやじの会」を立ち上げた時に「参加いただけますか」、「こういう形ならば参加できますか」。



・お父さんも頑張っている姿を見せたいという意見。

・PTAの役員さんにかえて負担をかける。

○コンセプト

- ・いろんな事業計画に縛られるのではなく、参加できる時だけ参加しよう(気楽な気持ちで)
- ・正式なPTA活動(堅苦しい)
- ・仕事で培ったノウハウを活かせないか。

②キャッチフレーズ

「できる人が できる時に できることを」

③名称

- ・「湖族」(堅田独自すぎる)
- ・「おとうさんクラブ」(お母さんが入り難い)
- 「おや連！」(お母さん方も一緒に入っていただける)

④メンバー

- ・小学校の子どもさんが卒業されても残っていただける。
- ・最初はPTA役員を経験された方



大津市子ども会育成連合会(子市連)、子ども安全リーダーへ

※ 組織:14~17・18名(在校生がいる:OB=1:1)……＜できる範囲での参加＞

⑤その他

会則、規約等 なし



(3)「堅小 おや連！」の組織

<組織>

- ・学校の範囲内での有志活動
- ・市や地域の各種団体としての位置づけではない

【小学校PTAの下部組織の認識】

- ・事務局長 ・事務局次長 ・会計



(4)活動実績

①<堅田小学校>

- ・流しそうめん
- ・学校正門のペンキ塗り
- ・グラウンド隅にある木の遊具づくり(間伐材)
- ・スポーツ教室
- ・「思い出のランドセルギフト」……使用済ランドセルをアフガニスタンに送ろう。
- ・足型フットマーク設置



②<堅田小学校PTA主催「わいわい祭り」(11月)>

- ・1ブース1コーナーで廃食油を使つてのキャンドルづくり
- ・「おばけ屋敷」……学校の多目的教室利用

③<堅田学区>

【湖族まつり】自治会対抗「湖族船競漕」

……「おや連！」の宣伝になる

【堅田まち歩きウォッチング】

……自治連合会とタイアップ・ヴォーリス建築の堅田教会、東洋紡の中、酒屋造船場、居初氏庭園「天然図画亭」



<おや連 ホームページより引用>

2. 活動成果

- ①「流しそうめん」では、親子も喜ぶ顔が見られた。
- ②足型フットマークの取組では、安全についての意識付けができた。
- ③「思い出のランドセルギフト」では、国際理解につながった。
- ④「おや連」の皆さんは事業をととして自分たちが楽しんでおられる。
- ⑤諸活動が地域の活性化につながっている。
- ⑥別の組織の個人個人持っているネットワークをうまく活用している。
- ⑦PTA以外にも、地域の子どもたちのために活動されていることで、地域とのつながりやボランティア精神の涵養など生きたモデルとなっている。



<おや連 ホームページ <http://www.geocities.jp/o8ren/> より引用>

3. 課題について

- ①メンバー増加につながる仕向けをする。(メンバー各々がステップアップするための地域活動デビューの場であっても可)
- ②地域に貢献し得る組織へと発展させていく。
- ③活動に際して、学校の先生にお世話になっている部分がある。事務面、経済面においても自立が必要である。
 → 参加者の声(ニーズや要望)を次なる活動に反映する。
- メンバーの増強を図る仕向け……アンケートを実施
- 学校やPTAではやりたいが動き難い事業……「おや連！」で引き受ける。

4. 今後に向けて（地域連携を進めるために）

- ①「できる人が できる時に できることを」モットーに活動する。
- ②PTA保護者であってもOBであっても関係せず入会でき、自由に参加できる。
- ③学校を良くするために、学校を中心にして会員自らが楽しむことが大切である。
- ④PTA役員会と団体役員会とは、同一時間帯に会議を学校で開催する。
- ⑤PTA活動ではない、「おや連」という視点から組織し活動し、まちづくりのために「堅田まち歩きウォッチング」を実施している。
- ⑥立ち上げのためにPTAのOBで火付け役が居た。この方を中心にコーディネートをされている。
- ⑦「楽しいことをする」ことで輪が広がる。機材も会員個々のネットワークで借りることができる。

◇「コーディネートする人が他にいる」場合

<湖南省立石部小学校「学校応援団」>

1. 「学校応援団」の概要

(1) 「学校応援団」の願い

- ① たくさんの大人の中で育つ「自ら学ぶ子」「心の豊かな子」「たくましい子」を育てる。
(あなたの子どもは、今日、家庭と学校の先生の他、何人の大人のひとと話をしましたか?)
- ② 子どもとふれあう中で、楽しさ、やりがいを感じていただきたい。
(あなたは最近、自分の子ども、家族以外の、何人の子どもと話をしましたか?)

(2) 「学校応援団」の内容

① 設立の経緯

- ・10年前から「図書ボランティア『このゆびと一まれ』」が発足
- ・16年前から「子どもたちふれあいボランティア『いしべっこ』」が活動。
- ・平成20年度から文部科学省委託事業の「学校支援地域本部事業」に参入
→ 今までの事業と新事業とも併せて、コーディネーターがコーディネート。(学校に常駐)

〔学校〕

- ・家庭・地域・学校の『育ちのトライアングル』が必要
→ 地域の人と顔見知りになり、「つなぐ」という活動を
- ・子どもは「自信の源泉」が低く「自尊感情」の育成が必要
→ 「自信を育てる教育」を(「道徳」を窓口に道徳感覚を培う)
→ 学校: 「学びの土台」「こころの土台」「くらしの土台」

↓
「学校応援団」が支える



○コンセプト

- ・「特別なことをしていただくのではない」
- ・できる時間にできることを → 「子どもたちと顔見知りになっていただきたい」

② 設立に向けて

- ・「立ち上げ準備会」(自治会区長): 平成20年5月14日、6月24日
(「学校支援地域本部事業」: 平成20年～)
- ・「第1回本部役員会」: 平成20年7月29日
- ・「立ち上げ式」<石部文化ホール>
(自治会区長、PTA、スクールガード、商工会、老人クラブ: 平成20年8月20日)

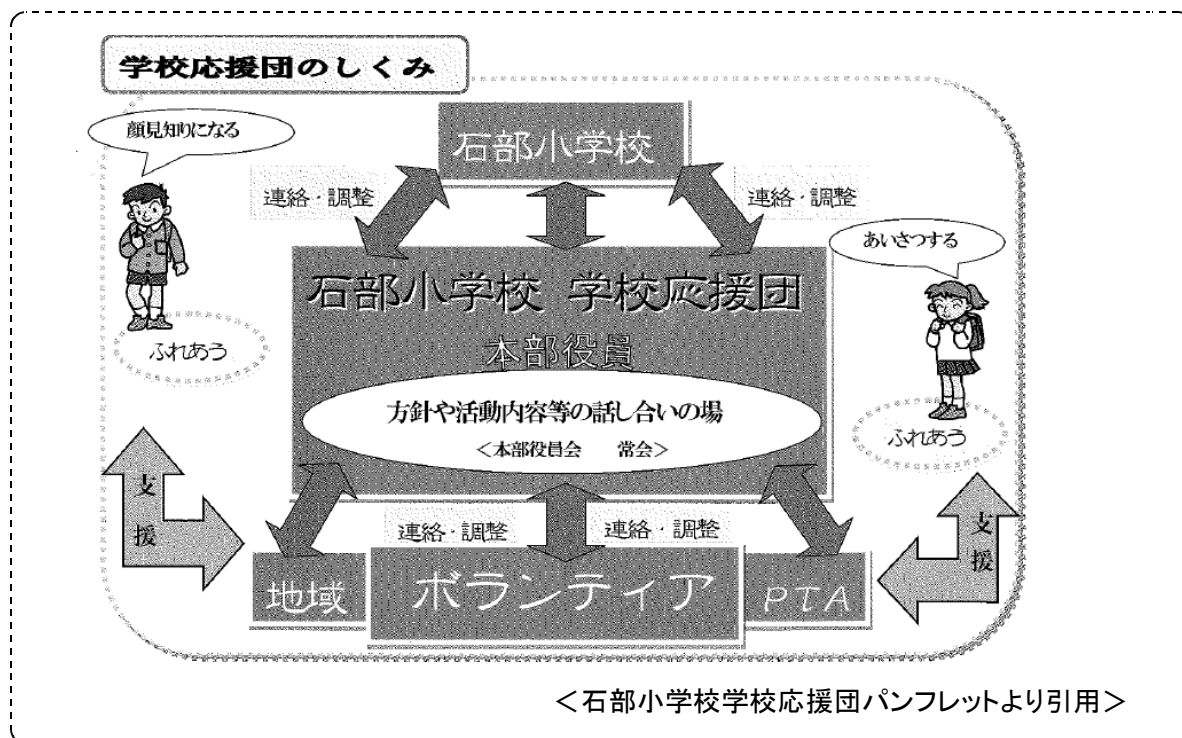
③ キャッチフレーズ「地域の教育力は、協力力」「地域の人と顔見知りになる活動(=つなぐ)」

④ 運営について

- <啓発> ・帽子 ・自転車のカゴに付ける啓発物
・幟旗の作成と設置 ・啓発紙の配布
- <会議> ・総会(1回/年) ・本部役員会(4回/年)
・常会(1回/月: 第3金 19:30～)
・事務局員会(地域コーディネーター)
- <ボランティア室(応援団室)>
・事務局員(地域コーディネーター)常駐
・児童昇降口を監視可能 ・応接セットを準備。



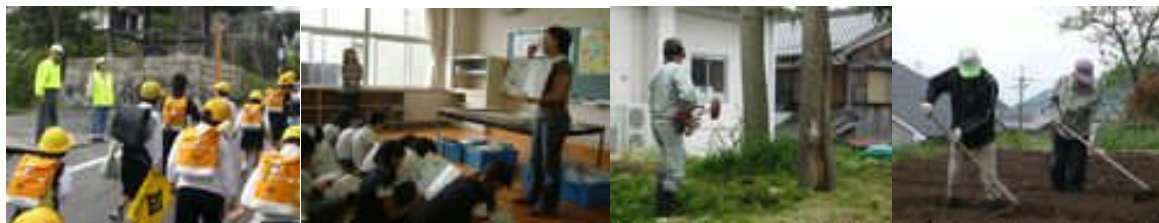
(3)「学校応援団」の組織(しくみ)



(4)活動実績

①活動ならびにボランティアの種類等

- ・見守り挨拶
- ・ラジオ体操
- ・交通安全・自転車教室
- ・図書館ボランティア
- ・ふれあいボランティア
- ・石小ホームページボランティア
- ・郷土資料整備ボランティア
- ・ふるさと石部学遠足
- ・掃除ボランティア
- ・環境整備ボランティア
- ・菊作りボランティア(生育者の写真付き)
- ・学習支援ボランティア
- ・図書ボランティア
- ・クラブボランティア
- ・日だまりボランティア
- ・見守りボランティア
- ・散歩ボランティア
- ・学生ボランティア



＜石部小学校学校応援団HP <http://www.edu-konan.jp/ishibe-el/> より引用＞

②学期別ボランティア依頼内容

【一学期】

- ・畑作り
- ・田植え
- ・野菜の苗植え
- ・ふるさと石部学遠足の見守り
- ・環境ボランティア 花植え
- ・雨山の道路整備
- ・ふるさと石部学のガイド案内
- ・環境ボランティア 草引き
- ・石部小学校ホームページの更新

【夏休み】

- ・図書ボランティア、夏休み図書室開放
 - ・中庭の草刈り
 - ・校庭の樹木の消毒
 - ・ラジオ体操への参加
- 【二学期】
- ・環境ボランティア 草引き
 - ・大根の種まき
 - ・江州音頭の指導
 - ・運動会前のグラウンド周辺の清掃、草引き
 - ・運動会での応援
 - ・稲刈りの協力
 - ・もちつき大会への協力
 - ・図書ボランティア
 - ・4年「やまの子」スペシャル
 - ・交通安全、自転車教室の危険箇所等の事前会議
 - ・交通安全、自転車教室の見守り協力
 - ・さつまいも堀り
 - ・マラソン大会での見守り
 - ・5年「フローティングスペシャル」
 - ・人権集会への参加
 - ・「クリスマススペシャル」
 - ・学校応援団旗づくり
 - ・郷土資料室の資料整備
 - ・石部小学校ホームページ更新
- 【三学期】
- ・大根パーティー
 - ・環境ボランティア 花植え
 - ・昔あそび
 - ・スキー教室
 - ・六年生を送る会への参加
 - ・PTA環境部
 - ・見守りボランティア意見交流会
 - ・図書ボランティア、六年生「卒業スペシャル」
 - ・学校応援団総会
 - ・石部小学校ホームページの更新

2. 活動成果

- ①常会・本部役員会・全員集会が定着した。
- ②当初よりボランティアの種類が増え、学校のいろいろな場で協力していただけるようになった。
各種ボランティアの活動も定着してきた。
- ③学校行事にボランティアの協力をいただくことで、行事内容が充実し安全に行えるようになった。
- ④夏休みのラジオ体操では、子どもと大人が顔見知りになることができた。
- ⑤広報活動により、学校応援団の活動が知られるようになってきた。
- ⑥子どもたちは、大人の人と接する機会が増え、「地域の人と顔見知りになる(=つなぐ)活動」が少しずつできてきた。
- ⑦学校の中にたくさんのボランティアが入ってもらうことにより、子どもと地域の方が多くの方と顔見知りになることができた。
- ⑧気軽にボランティアの派遣をお願いすることができるようになった。



3. 課題について

- ①「学校は敷居が高い」という考えが多く、これからも広報活動を積極的に進めていく中で、地域と学校のつながりをより深めていく。
- ②それぞれのボランティア同士の交流の場、またPTAとボランティアの交流の場を持ち、学校・家庭・地域が協力したり、意見を交流しあえるように活動を充実していく。
- ③各種ボランティアメンバーや地域の方からアイデアを積極的に取り入れ、学校を支援する地域の輪を広げていくことにより、支援の拡充と活動の充実を図る。
- ④事務局の部屋の鍵を事務局員に預けることが大事である。
- ⑤学校応援団における、まちづくり協議会・PTA等との関係性の明確化。
- ⑥学校応援団の認知度を高めるための取組
- ⑦「つなぐ活動」の更なる充実
 - ・学習ボランティアの充実
 - ・地域企業との連携
 - ・東日本とつなぐ
- ⑧教職員が変わっても継続する応援団組織の構築。(校長が定年退職で辞めても、次の世代が

そのまま引き継いで「つないで」いってくれるか。)

⑨「学校」―「まちづくり協議会」―「応援団」とで、連携の仕方とウェイトバランスができるが良い。

⑩地域の方の人材登録バンクづくりの推進。

4. 今後に向けて(地域連携を成功させるために)

①管理職のビジョン。こういう学校にしたい思いが必要である。

②コーディネーターが常時配置されていて、ボランティアさんたちもくつろげる休憩のできる部屋があることが大事である。

③学校の校門を入った所に来校者が把握できる事務局があることが大切である。

④学校は、地域の方々、子ども、保護者とを「つなぐ」という活動を重視していくことが肝心である。

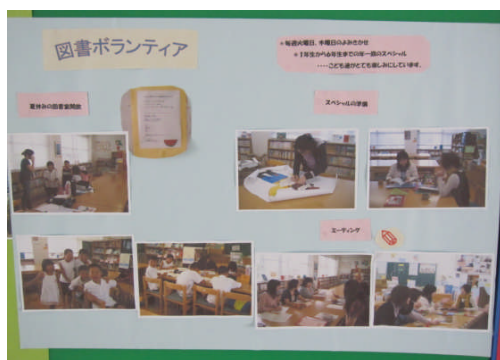
⑤教職員が転勤しても持続可能な組織を作っていくことが大切である。

⑥活動記録を残しておく、次年度にメンバーが変更になってもうまく活用することができる。

⑦地域全戸に対して、学校の支援をしてもらっていることを啓発することが大切である。

⑧旗、帽子のグッズを作り、広く市町民に団体の活動を啓発している。

⑨団体の立ち上げには、自治会区長、PTA、スクールガード、商工会、老人クラブなどに広く係わってもらうなど、地域の意見がもらえることが大切である。



滋 賀 県 社 会 教 育 委 員 会 議

『学校を中心とした地域連携による生涯学習の環境づくりについて』

～「まなぶ いかす つながる」地域づくりの可能性～

発 行：平成24年(2012年)3月

事務局：滋賀県教育委員会事務局生涯学習課

〒520-8577 大津市京町四丁目1-1

TEL 077-528-4654

Hp： 「におねっと」 <http://www.nionet.jp/>